

Japan Society of
the Graded Direct Method
and Basic English

Year Book

No. 72

内 容

C. K. オグデンとI. A. リチャーズのかかわり	相沢 佳子	2
中学校で求められている授業改善とGDM ～学力調査の結果から～	松浦 克己	8
Basic English研究の一視点 空間詞 ON とOFF	後藤 寛	15
4コマの絵と英文でつくる — 作品を読む視点, 書く視点	吉沢 郁生	28
書評 相沢佳子『C. K. オグデン：「ことばの魔術」からの出口を求めて』	飯嶋 良太	34
中郷安浩さんとの学び	吉沢 郁生・上島 光代・伊達 民和・河村有里子 山崎 典子・松川 和子・麻田 暁枝・福本 洋 昆布 孝子・近藤ゆう子	36
支部活動報告（東日本支部&西日本支部）.....		42
編集後記		44

発行：GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：山崎典子

東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax：045-934-8314

西日本支部 〒567-0034 茨木市中穂積1-5-B-605

此枝洋子方 Tel：080-8167-1993

<http://www.gdm-japan.net/>

C. K. オグデンと I. A. リチャーズのかかわり

相 沢 佳 子

オグデンは Basic English を考え出した人、リチャーズはその Basic を使って GDM という英語教授法を開発した人として知られている。2人はそれぞれ Basic, GDM だけでなくその他数々のすばらしい業績をあげている。私自身は Basic への興味からオグデンに関して調べてきた。他方リチャーズについては片桐さんが GDM や修辞学などから研究されている。ただオグデンとリチャーズの間には切っても切れない深いつながりがある。もしお互いが出会わず、つながりがなかったとしたら、彼らそれぞれの輝かしい成果がみられたらどうか。Basic も GDM も生まれていなかったかもしれない。そこで今回はこの2人の間のつながり、関係を追ってみたい。そこには先ず運命的な出会いがあった。

1) 2人の最初の出会い

リチャーズ (1893-1979) はオグデン (1889-1958) より3年後にケンブリッジ大学に、しかも31もある college の中の同じモードリン・カレッジに入ってきた。そこは私も訪れたことがあるが、こじんまりしたなかなか感じのよいカレッジだ。彼はオグデンとの最初の出会いを次のように書いている。

リチャーズは入学後しばらくして専攻していた歴史学にどうも満足できないで何か他の学科を学びたいと指導教官の元に相談に行った。教官は親切で同情してくれて、ランチの時にじっくり話を聞こうと言われた。ところが当日の昼彼はテニスにと出て行き、そこにオグデンがいたのだ。彼は小柄だが、威厳のある様子をしていた。初対面だったがオグデンは大学内のほとんど全科目について、教師が何を何故教えているかなど並外れた知識を持っていてきれいな疲れを感じさせない声で午後一杯話してくれた。“Will you change your mind, if I convince you?” (私が説得すれば、君は考えを変えるかね) というのが彼の最初の決まり文句だった。

オグデンは威圧的ではあったが結局倫理学を専攻するのがよいだらうと説き伏せられ、リチャーズは納得して彼の部屋までついて行き倫理学の初歩の本をもらってきた。それらは後に倫理学を学ぶのにとっても役立つとか。リチャーズはこの専攻の選択を後悔したことは一度もないと言っている。その時のオグデンの様子を次のように述べている。彼は小柄で静かで年寄りっぽく見え、うろたえさせるようなピカピカの眼鏡をかけていたと。ちなみにオグデンは大学では「ギリシャ語のギリシャ思想に及ぼす影響」を専門に研究していた。これは後にことば一般が思考にどう影響を及ぼすかという彼の中心課題へと広がっていった。

2) 2度目の出会い

オグデンとは通じ合うところが多かったが、リチャーズはその後4年間彼には会ってなかった。ところがある事件が起きた。4年後の1918年11月11日、第一次大戦の終戦記念日に2人は再び出会ったのだ。急進的な国粋主義の学生たちがケンブリッジにあるオグデンの3軒の本屋と画廊をおそってめちゃめちゃにした。オグデンの本屋というのは、戦時中紙不足で彼はくだらない本を集めてはパルプとして雑誌などの紙と交換していた。当時たまたまオグデン

の店の2階に住んでいたリチャーズは彼が本の仕分けをしながら、「こんなくだらないこと。Must stop this soon, Must stop this soon.」と言う声が階下からよく聞こえたという。学生たちはグランドピアノを始め絵や本など店から外に投げ捨てた。

オグデンは戦時中平和主義を唱え、彼が編集していた大学雑誌にも外国、特にドイツからの記事などを載せ、また教育関係の視察にドイツにも行っていたので「ドイツびいき」、「戦争反対者」と見られていた。その時オグデンは見つかったら川にでも投げ込まれたかもしれないが、戸口のところでじっと彼らを観察していた。眼鏡を頭の方にあげ、手で目と口をおおっていたので彼だとは気づかれなかった。リチャーズも脇で騒ぎを見ていた。その晩遅くオグデンは暴徒たちの誰かを知らないかと店の上の階に住んでいたリチャーズの元を訪ねてきた。2人は当時家主と借り手の関係だけだった。

リチャーズもはっきりした答えはできなかったが、その帰り2人が階段を下りて行く途中、踊り場でオグデンは立ち止まり、当時の *Mind* 誌での論争について話しはじめた。2人の話ははずみ3、4時間の間に『意味の意味』の主なアウトラインははっきりし、そのために2人が共同で仕事をしようという計画が生まれたとのこと。リチャーズはこの階段の曲がり角のことを鮮明に覚えていると語っている。

3) 2人の共著『意味の意味』(1923)

副題に「言語の思想に及ぼす影響および象徴学の研究」とあるようにこの本は思考をくもらせるコトバの力を意識させ、象徴学という科学を確立することを目指した。それまでの言語学は意味という大きな問題やコトバと人の考えとの関係は扱ってこなかった。因習にとらわれない、一つの科目に収まらない境界上の新しい分野に挑戦するという意気込みが彼らにはあった。2人の役割について、オグデンは豊かな知識、発想の面白さ、臨機応変の才、読者層の意識などに、分析や結合は同じくらいリチャーズが力を入れたと。理想的とも言える2人の共同作業によって、個々の研究では難しいこのような大著が可能になった。

リチャーズはこの2人の共同作業について次のように語っている。2人の全く異なる気性が2つの目で見るとコミュニケーションを、またその誤りを一緒に見つめた。少しずつお互いのことば、考えを理解するようになり仕事ははかどってきた。オグデンはロンドンで雑誌の編集その他数々の仕事をしていて、それらを終えて最終電車でケンブリッジに戻り、彼の部屋で深夜から翌朝にかけて2人はこの仕事をした。オグデンがもてなしてくれたココアやビスケットがたっぷりなかったら仕事ははかどらなかつたろう、また彼のユーモアも気分をほぐしてくれた。リチャーズは歩き回ってしゃべり、オグデンはベッドに座って書き綴っていった。

4年かかって出来上がったこの大著には1989年版にはU.Ecoの序文が付き、日本語訳も2008年版まで続いた。この世界的な名著は先にあげた2人の出会いがなければ存在しなかった。2人のこの書に対する情熱は大きかった。4年後リチャーズは初版を読み直してすごく満足し、余白に「God alive」と書いたが、ところがさらにその4年後、3版の改定をしていて間違えに気づき疑問を抱いた。「これは問題だ」、「混乱」、「No, No, No」などと記している。書き直したかったようだが、オグデンは長いことこの書に完全に満足して10年後にも「すばらしい、全く完璧」と書いている。

2版から4版までの序文でその後彼ら2人のさまざまな仕事はここから展開していることが

記されている，オグデンは Basic，ペンサム研究など，リチャーズは文芸批評，教育，解釈論など。共にこの著を創造的源泉として活動が広がっていった。

4) Basic English へのきっかけ

オグデンは学生時代から国際語についても関心を持っていて，長いことその理論や歴史を調べていたが、『意味の意味』がなければ Basic が生まれたかは疑問だ。ということはオグデン一人だけでは Basic は出来上がらなかったかもしれない。『意味の意味』の定義論の章でいろいろな語の意味を定義，つまりわかりやすく言い直してみると彼らはあることに気がついた。ある限られた数の要素的な語がいつも定義の中には出てくることを発見したのだ。例えば，enter は go into, return は go back, rush は go quickly, explode は go off などすべてに go が使われている。それら少数の基本的な語だけで他の複雑な語の意味を言い表せるということになる。2人は突然お互いを見つめ合って言った，「つまり 1,000 語以内で何でも言えるのではないか」と。

このこと自体は 17 世紀すでにライプニッツやウィルキンズなども唱えていた，あらゆる概念は完全に分析して数少ない単純項，基本的要素にもどせると。ただオグデンとリチャーズはこの事実からさらにそれらだけで何でも言えるような基本的な小英語の組織が出来るのではないかとまで思いついた。これはすばらしいことだ。彼らはこの最小英語という考えにすっかり夢中になった。リチャーズはこの時の 2 人の興奮をはっきり覚えていると書いている。『意味の意味』の仕事を一時中断してもこの問題の方が大きいからこれを進めたかったが，本の完成が遅れてはいけないと思いとどまった。つまりこれが Basic の芽生えとなったのだ。

5) Basic English 誕生

『意味の意味』の定義論での Basic への可能性から実際に Basic が完成するまでは長い苦勞の道のりがあった。リチャーズは次のように語っている。そのとっかかり，総体的な構想はかなり自分のものだったが，Basic そのものは細部に至るまですべてオグデンが考え出したもの，彼一人が成し遂げた偉大な作業だったと。オグデンの発想の豊かさ，臨機応変の才，鋭い理解力，調和のとれた才脳は次から次へとその可能性を探求した。彼のことばについてのねばり強い実験作業が，他の人になかった優れた能力や組織的に啓発した言い換えの天性の能力などと相まってこれが可能になったと。1,000 語以内で簡素化できるとしても，どこで利点のバランスをとるか，簡潔さ，規則性，学習しやすさ，範囲の広さ，明晰性，自然らしさなど，語表や規則はアコーディオンのように伸び縮みしたと。

そして 1930 年に Basic は正式に発表された。結果としてオグデンは何千年という間洗い清める必要があった馬小屋に，Basic によって新鮮な考えのほとばしる流れをもたらしたとリチャーズは比喩を使ってオグデンを賞賛している。今から 90 年も前にこれほどグローバル化が進み，国際語として英語が必要になるとは予想もしない時代にこのような簡素英語を考案したこと自体オグデンの先見の明にただ感心するばかりである。

6) Basic English 誕生後

共著の『意味の意味』が成功したので，2 人の名前も広く知られていた。そのため彼らの名

前は固く結びつき、その後の仕事も2人の共同作業と間違っただけでとらえられたりした。Basicを称えたChurchillの演説の中でも考案者をオグデン、リチャーズとしている。後にリチャーズはそれをとても心苦しく思ってその取り消しに苦心した。

1927年オグデンはOrthological Instituteという研究所を設立して、そこをBasic活動の本部とした。彼は何冊ものBasic関係の本の著述やその出版、海外への普及、教師養成などに励んだ。10年ほど国内外共に順調に進んできたBasicの発展も第2次大戦で紙不足、教師不足、海外との連絡取れずなどで大きく後退した。戦時中Churchillは演説の中でのBasicの有用性を称え、国としても支持すると表明した。Basicの名前は思いがけず広まったが、国が後ろ盾になるなら資金はイギリス政府が出すと思われた。そこでそれまでアメリカのロックフェラー財団などからきていた援助金も終わってしまった。オグデンは資金難に苦しみ、政府とのやり取りなど必死になって頑張り、終生Basic発展に励んだ。

一方リチャーズはBasicについても大いに興味を持ってすぐに学習し、*Basic English and Its Use* (1943)など関連の本を何冊も書いた。*Basic Rules of Reason* (1933)では認識論の本をBasicで書いている。簡素英語でも普通英語と何ら変わらない、このような論理的著作はむしろその方が適していると言って。彼はBasicの一番の理解者、オグデンの一番の協力者だった。

また彼は中国でBasic普及に務め、入門期の英語の教え方などに力を注いだ。1939年彼はロックフェラー財団の助成金で、それまでの文芸批評の研究とBasicを使った実験をするようにハーバード大学に招かれた。リチャーズはアメリカに渡りBasicを始め読解力の向上に、ついで中国などの経験から入門期の英語教育へと活用した。Basicは言語習得の原理として習慣を洞察に変えようとする試みという点から開発したのがGDM教授法であり、苦労の末出来たのがその教材*English through Pictures*である。リチャーズはそれまで文芸批評や科学と詩などについて研究して本を書いてきた。40年代にそれらの仕事から入門期の英語教育へと移ることに周囲の反対も大きかった。同意してくれたのはT.S.エリオットだけだったと言っている。

リチャーズの開発したGDM教授法は言語材料をBasicにしているだけでなく、オグデンの言語についての考えも上手に活用している。「対比」の理論はオグデンのBasic作成中、どの語はなくても済むかなどから生じ、彼はいろいろ研究して*Opposition* (1932)という本にまとめた。ちなみにこの序文はリチャーズによって書かれている。このopposition「対比」という概念はことばの主要原理の一つとリチャーズも考え、GDMのテキストではhere/thereをはじめとして非常に有効に使われている。またメタファーもBasic作成の最大の部分で、オグデンは語の意味の拡大にこれを有効に使った。このメタファーもGDMでは人の脚から机の脚へなどうまく活用している。リチャーズは*Philosophy of Rhetoric* (1936)でメタファーを取り上げて詳しく論じている。それまで軽視されていたが言語に遍在するメタファーとして取り上げられた1980年のレイコフらの*Metaphors We Live By*より半世紀近くも先駆けている。

Basicの英語教育への応用について、オグデン自身は記憶力も抜群、言語に関しても鋭い勘を持ち一般の人の語学学習のむずかしさには余り気づいていなかった。実際、天才少年だったオグデンは訳読式で外国語を苦なくマスターした。そこで外国語をどう教えるか、授業のデザインについての興味は余りなかったとリチャーズは述べている。

またリチャーズはBasicには母語話者には理解力を向上させる用法があると主張し、解釈論で英文をBasicに訳すことの効用について論じている。語彙が限られているため、英文を訳す

のに同義語に置き換えることはできない。元の英文が何を言っているか丹念に解き明かさなくてはならないので当然英文のよりよい理解になると。

またリチャーズは Basic への抵抗を少しでも減らしてこれを広めようと柔軟性をとり入れて修正することを考えていた。コトバは生きているもので成長し、健全な成長を促し、時代に応じて変わっていくからと説明している。そこで語を増やしたりして near/wider Basic を考え、後にこれは Every Man's English (EME) と名付けられた。動詞制限をゆるめて attack, attempt など名詞を動詞に、また agreement から agree, addition から add と名詞の語尾を取って動詞として使えるようにした。さらに頻度が高くよく使われる think, want などを入れて。名詞なども必要度の高いものは入れた。

7) 2人の決別

2人はあれほど意気が合って一緒に仕事をしてきたのに、リチャーズのこのゆるやかな Basic が発端となって彼らの間には海を挟んでひびが入っていった。1940年ごろリチャーズは意味のよく分からない生徒にと学校のテキストなどもこの near Basic で準備をし、将来学校の印刷物すべてにこれを使いたいと伝えている。アメリカでは彼らのこの活動がとても成功したので大学側もこの活動に賛成し、人々の関心をひいてメディアの注目も浴びるようになった。プラトンの「共和国」なども初めは Basic で、後に near Basic に書き直した。一方オグデンはさんざん苦勞して考え抜いて作った Basic を改良することは許せなかった。2人の間の手紙のやり取りはだんだん厳しくなっていった。

1941年オグデンは仲間「リチャーズはプラトンの本について私の提案通り Basic を利用してではなく幅広い Basic でと称しているが大変残念だ」とか「リチャーズは Basic の厳密さにあきあきしたと言っているが、それを聞く方がうんざりだ」と書いている。リチャーズは Basic が読解教育をはじめとして様々な用途で効果的ということについて雑誌や新聞などに記事をいくつも書いている。1944年リチャーズからオグデンに「この頃のあなたの手紙はぐちっぽく、権威をかさにきて思い上がっているようで私を悩ませている。Basic のためというよりそちらの利益のためというような仕事はしたくなくなった」と。

1945年リチャーズの活動の幅はどんどん広がった。この年 *The Pocket Book of Basic English* が発刊されるが、これは最終的に *English through Picture* (1952) と名前を変えた。理由は Basic という名前をめぐるのオグデンとの間のむずかしさを避けるためだった。彼は「私は Basic を教えるより良い方法を開発しようと仲間たちと努力してきた。それでも最大の功績があなたや Basic に行くように細心の注意を払ってきた。…それなのにあなたはまるで私が Basic 本来の特色を盗んだかのように思って敵対心がますますひどくなっていく」と書き、一方オグデンは「君のやっていることが教え方の進歩とは思えない。本もアメリカでの Basic として出すなら独立したアメリカの系列とみなしたい」と言い、ここで2人は完全に決裂した。

リチャーズはオグデンと最後にはこれほど仲たがいしていたが、オグデン没後の記事などでは彼の仕事、Basic のすばらしさを称え、とても好意的に書いている。彼は *How to Read a Page* (1942) でも読み方を改良するのに最もよい方法は重要な語、他の語がそれに頼っているような key words をしっかり学ぶことが大切と主張している。そこに出された 100語の great words はすべて Basic Words である。この中でもオグデンの Basic がいかにすばらしいものか、また

Basic が外国人の英語学習のためだけではなく、母語話者にも英語をよりよく理解するのにすばらしい手段だと言い、また Basic は語同志の相互関係、意味の多様性などへの感覚を鋭くさせると指摘している。

8) 2人の共通点と違い

オグデンとリチャーズは共にたぐいまれなすばらしい知性の持ち主で、共著の他にそれぞれが立派な業績をあげている。2人ともコトバにかかわることが主だが、研究は奥深いだけでなく広い範囲にわたっている。オグデンは著書30冊、ホンヤク書15冊、論説など無数、リチャーズも著書15冊、その他230点ほど書いている。また2人ともに仕事の上で優秀な女性の秘書、協力者に恵まれ助けられていた、オグデンにはロックハートが、リチャーズにはギブソンが。また余計なことだが、2人共若い時に大病で苦しんだ、オグデンは激しいリユーマチ熱で2年ほど床につき、リチャーズもひどい結核で苦しみ、やはり2,3年学校に行けなかった。

ただ2人の性格上の違いは大きかった。これまで書いてきた話はすべてリチャーズの記事やインタビュー、小論などを参考にした。彼は個人的なことを初め、オグデンやBasicと自分とのかかわりなどいろいろ発表している。他方オグデンは学問上のことはたくさん書いてきたが、自身の個人的なこと、Basicとのかかわり、リチャーズとの関係などについては一切書いてない。彼は元々秘密主義者で自分を隠したがっていた。仮面を集め、新聞記者とのインタビューでは自分もかぶって驚かせたのもその一面であろう。またいくつもの筆名を持っていたのもその表れだ。中でも Adelyne More という女性用のペンネームをととても好んで論文や本にまで使った。

注

最後に書いたように本文の参考にしたのはすべてリチャーズの書いたものからである。彼はいくつもの記事やインタビューにも同じようなことも書いているので、参考にした主なものを以下にあげる。

I. A. Richards (1957) "Some Recollections of C. K. Ogden," *Encounter* 48, Sep 1957, 10-12.

(1977) "Co-Author of the Meaning of Meaning," P. Florence & J. Anderson (eds.) *C. K. Ogden: A Collective Memoir*. London Elek Pemberton.

(1973) "Fundamentally, I'm an Inventor," *Harvard Magazine* Vol 176, 50-56.

"Beginnings and Transitions: I. A. Richards Interviewed by Reuben Browner"
A. E. Berthoff (ed) *Richards on Rhetoric* (1991) New York. Oxford Univ. Press.

中学校で求められている授業改善と GDM ～学力調査の結果から～

松 浦 克 己

はじめに

これからの学校教育の方向を示す新学習指導要領が小学校では 2020 年 4 月に、中学校では 2021 年 4 月に全面実施となる。その目指す内容の大きなこととして、主体的・対話的で深い学びの「アクティブ・ラーニング」があり、英語科ではそれに「授業を英語で」ということが強く求められている。これらについては学習指導要領やその解説書で詳しく述べられているが、より具体的な授業改善の必要性や方法が、平成 31 年 4 月に全国の中学 3 年生に実施された全国学力・学習状況調査の報告書¹⁾に書かれている。この報告書のなかで設問の趣旨、誤答例や正答率、分析と課題、そして日々の授業の改善・充実への指摘が詳しく述べられている。そのなかのいくつかを紹介し、GDM との関連を見ていきたい。

1. 時制の理解がむつかしいのは

学力調査の大問 9 の設問 2 と 3 では一般動詞の理解を問う問題となっている。

設問(2) () の語を適切に変えたり、不足している語を補ったりして文を完成させなさい。

①〈朝の通学路で〉

A : I watched a baseball game yesterday. It was so exciting.

B : Oh! (like) baseball?

A : Of course. I love playing and watching baseball.

②〈休み明けに教室で〉

A : Was your vacation good?

B : Yes. My family and I went to Australia. (stay) there for two weeks.

A : Wow! Wonderful

①は一般動詞 2 人称単数現在時制の疑問文を、②は一般動詞 1 人称複数過去時制の肯定文の理解を聞いており、①で Do you like と答えた生徒は 61.8% (全国で、以下同じ) ②で We stayed と答えられた生徒は 20.5% であった。これらの問題に関する「学習指導に当たって」(報告書 P 54) では次のように指摘している。

文を正しく書くためには、言語材料の定着が必要である。コミュニケーションにおいて時制や人称は大切な事柄であり、文脈から適切な文の形式や時制を判断する (1) ことが大切である。指導に当たっては、一文のみを示して空欄の動詞の形を考えさせる (2) のではなく、対話や文章の流れからふさわしい文の形式や時制を考えさせる活動 (3) などが考えられる。その際、確実な定着を図るために、ある程度の分量の練習をさせることも重要である。(下線筆者)

設問 (3) は、与えられた情報から、その人物を説明する英文を書くといった内容である。その情報は①出身…Australia ②住んでいる都市…Rome ③ペットの有無…×のように示さ

れ、その英文と正解率は次のようになっている。

- ① She is from Australia. She comes from Australia. 54.2%
- ② She lives in Rome. 33.7%
- ③ She doesn't have any pets. She has no pets. She doesn't have a pet. 38.3%

(どれも大文字・小文字の間違いについては許容範囲として数字に含む)

この3問の出題意図である「3人称単数現在時制の肯定文と否定文を正確に書くこと」に課題があると指摘している。そして「学習指導に当たって」(報告書 P 60) では次のように指摘している。

特定の言語材料のみを用いて文を書かせるだけでなく、コミュニケーションの目的や場面、状況のある言語活動において、様々な個別の知識を活用させて文を書かせることを授業の中に位置づけるようにしたい。(略) 具体的な指導として

- 憧れの人物や友達紹介など、3人称を使った言語材料(4)を…繰り返し使用する活動
- 生徒同士で書いたものを…互いに…修正を加える活動
- 「ローマ出身です」のように日本語では省略される傾向にある主語を…考える活動
- 「誰が? どうするの? どこに?」のような発問を…基本的な文構造を確認する活動

報告書 P 54 と P 60 の指摘は、授業改善の方向として正しいものであるが、なぜ時制の理解がこんなに不十分な状況であるかの原因について大きなことを見落としている。それは教科書の時制の指導順序である。どの教科書もだいたい同じであるが、New Horizon では次のような順序で指導する。

(I) 一般動詞 1, 2人称現在(1年5月下旬) (II) 一般動詞 3人称現在(1年10月下旬)
(III) 現在進行形(1年11月) (IV) 一般動詞過去形(1年2月)

(V) be 動詞過去形(2年4月) (VI) 未来の表現 be going to(2年6月) will(2年10月)

教科書の現在進行形の単元では「今していることについて話したり、たずねたりすることができる」また過去形の単元では「過去の出来事について話すことができる」といった目標が示され、基本文の横には進行形の文とか過去形の文といった文法用語の説明が続く。このようなこの単元では進行形の文を練習しましょう、この単元は過去形の文を言えるようにしましょうといった教科書の指導と、目の前の場面が He will take ~ の場面なのか、それとも He is taking あるいは He took なのかを自分で選択させるような GDM の指導のどちらが時制の概念を形成させるのに有効かは明白である。報告書 P 54 の下線部(1)「文脈から適切な文の形式や時制を判断する」や下線部(3)「対話や文章の流れからふさわしい文の形式や時制を考えさせる活動」という指摘に合致しているのはどちらの指導法なのかも明らかである。日本人にとって時制が苦手なのは、その概念が違う英語の時制からこの内容はどの時制の言い方なのかを選択することが難しいということがポイントであり、教科書の指導順序にそってそのまま教えるやり方では日本人にとって苦手な時制の対策には効果的でない。教科書では下線部(2)の「一文のみを示して空欄の動詞の形を考えさせる」をその単元全体で練習しているに過ぎないからである。

上記(I)から(VI)における教科書の基本文は本文中の一文が扱われていて、文脈から適

切な時制を使う指導に合致しているかに見えるが、play という単語の原形を示し、次にその原形に「s」が付く形、次は「ing」、そして「ed」というように語形変化を教えているのとあまり変わらない内容である。さらに原形を出発点としているので、現在形の文からスタートすることになり、この現在形の文を基に進行形の文に変形させる、現在形の文から過去形の文を作るという教え方になっている。GDM のコントラストの観点から現在形と現在進行形、あるいは現在形と過去形のコントラストがその表している内容を考えれば無意味であり、英語の時制の基本的概念の理解につながらない。このことの対策をせずに報告書にあるように「ある程度の分量の練習」をいくらさせても効果的な授業改善とはならないであろう。

2. 人称代名詞を理解させるには

まとまりのある文章を書く問題の大問 10 では、テーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くことができるようにすると指摘されている。具体的な指導として次の 4 点が提起されている。(報告書 P 66, 67)

- 「話して書く」「読んで書く」等の領域を統合した指導を行う。
- 英文を読み合い、よりよく読み手に伝わるように書く指導を行う。
- 書くことを増やすための指導を行う。
- I, You 以外の主語を用いて書く指導を行う。

自分や相手のことを伝えるときに主として用いられる I や You に比べて、I と You 以外の主語の場合には、伝える内容が豊富になるだけでなく、主語の数に応じて動詞の形を変化させる場合や主語に適した動詞を選ぶ必要がある場合など、英語の文、文構造や文法を的確に活用する必要が生じる。…例としては、調べたことについて説明や報告をしたり、絵や写真の様子を表現したりするような言語活動 (5) が考えられる。

報告書 P 54 では「コミュニケーションにおいて時制や人称は大切な事柄であり」また報告書 P 60 の下線部 (4) では「憧れの人物や友達紹介など、3 人称を使った言語材料を…繰り返し使用する活動」そして上記のまとまりのある文章を書く具体的指導の 4 点目 (報告書 P 66,67) で「I, You 以外の主語を用いて書く指導を行う」とあり、人称に関する理解が不十分という結果が述べられている。その大きな理由に教科書や We Can! (2019 年まで全国の小学校で使われていた文科省発行の教材、児童にとっては教科書であるが、教科ではなかったので教科書とは呼ばれていない) の人称代名詞の扱いが挙げられる。中学校の教科書における人称代名詞の指導順序に大きな問題があることについては、Year Book No.69²⁾で詳しく述べた。小学校で We Can! を使って 2 年間 140 時間そして 600 以上の単語を扱うのに、they, his, her は出てこないといったことは昨年 Year Book No.71³⁾で指摘した。これらの筆者の指摘が今回の学力調査の結果からも証明され、報告書でもその対応の必要性が言われている。中学校のある教科書では、our の初出が P 34 で、we の初出が P 50 となっている。its, us, their, them は、人称代名詞の一覧表が載っているまとめのページが初出で、つまり表で覚えなさいという扱いである。人称代名詞の理解は英語と日本語の世界観が違うことがとても大きなポイントであるが、教科書の上記のような遣いはそのことをまったく考慮せず、日本語に置き換えて理解させればよい、そ

して表で機械的に丸暗記すれば使えるようになるという姿勢と言わざるを得ない。今回の報告書の中で何度も指摘されている「意味ある言語活動」「コミュニケーションの目的や場面、状況のある言語活動」といった内容とは真逆の扱いであり、その結果が今回の調査に表れている。報告書 P 67 の下線部 (5) の「調べたことについて説明や報告をしたり、絵や写真の様子を表現したりするような言語活動」ももちろん有効であるが、隣の生徒の鉛筆を指して、This is his pencil. It is in his hand.と普通に言えないのに上記のような活動を指導してどれだけ効果があるか疑問である。多くの生徒にとっては砂上の楼閣となりはしないだろうか。

GDM の I, You, He, She, It, They から in, on までの流れは、人称代名詞の理解に関して中学の教科書や We Can! と比べとても有効な指導である。日本語と比較して英語の 3 人称の最大の特徴は、He と She と It を同じ扱いをすることである。それぞれの複数 They で同じ、be 動詞は is, was で同じである。He, She と It の They は日本語では区別するし、is も「います」と「あります」と分ける。一覧表で 3 人称という枠で一緒にしてもその概念を理解させることはできない。GDM の指導順序とまさしく「コミュニケーションの目的や場面、状況のある言語活動」=GDM のライブによれば理解させることができる。

3. 文のルールに気づかせ、定着させる言語活動とは

報告書 P 60, 61 では次のような太字の問いかけで始まるメッセージが載っている。

【コミュニケーションを支える文法指導に取り組んでいますか】

現行学習指導要領の下の英語教育は、移行期から約 10 年が経過しました。英語の授業はどのような改善が図られてきたのでしょうか。…改訂の趣旨として「コミュニケーション能力の基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る」ということが記載されています。…

大問 9 で、基本的な語や文法事項等の理解を問う問題を出題しました。いわゆる「知識及び技能」を測る問題であり、生徒の習熟が十分に図られているべき文法事項であるとしておりましたが、調査結果は予想をはるかに下回るものでした (5)。文法指導がコミュニケーション能力の育成を図る指導と対立するものではなく、円滑なコミュニケーションを行うためには必要不可欠であるということを強く認識し、授業改善について真剣に考えていく必要があります。

生徒が文法規則の説明を理解し、その規則を説明できたとしても、文法を十分に理解しているとは限りません。実際のコミュニケーションにおいて、その文法事項を用いて正しく英語で表現できたときに、その生徒は生きて働く知識を有していると言えます。では、そのような力を育成していくにはどうしたらよいのでしょうか。新学習指導要領では、文法事項の指導に当たって、コミュニケーションの目的を達成する上でいかに文法が使われているかに着目させ、その必要性や有用性を実感させながら、理解や練習と実際の使用のサイクルを繰り返し、言語活動と効果的に関連付けて指導する (6) ことが大切であるとされています。

Do you like (61.8%) / We stayed (20.5%) / She is from (54.2%) / She lives (33.7%) / She

doesn't have (38.3%) これらの正答率が意味することは、数字自体としてはもっと低い問題(数%の問題もある)も幾つかあるのに対して、下線部(5)に言われているように「予想をはるかに下回る」という点である。報告書における他の分野での【 】のなかのタイトルが、普段の聞き取りで意識したいこと、…から見えるもの、…授業づくりのために、といったような客観的な言葉遣いに対して、ここだけ「取り組んでいますか」という感情が強く入った表現になっていることから、文科省の担当官が感じていることの深刻さが読み取れる。

英語の基本的な概念を定着させるためにどんな指導が必要かを下線部(6)で指摘している。この部分をもう少し具体的な言い方してみると次のようになるのではないだろうか。

①「コミュニケーションの目的を達成する上でいかに文法が使われているかに着目させ」

⇒目の前で物を使ってその違いがクリアーに分かるように提示して⇒コントラストでその使い分けに気づかせる

②「その必要性や有用性を実感させながら」

⇒その使い分けが少しずつ詳しくなっていくことを実感できる

③「理解や練習と実際の使用のサイクルを繰り返す」

⇒説明をすることなく実際の場面で使っていくなかで気づき、理解を深めていく⇒理解と練習と実際の使用が三位一体となって同時進行する

④「(文法の指導にあたって)言語活動と効果的に関連付けて指導する」

⇒考え抜かれた精緻な段階づけ(Graded)と適切な選び抜かれた基本的な語の使い分けをもとに、自分でルールを導き出す

上記の①と③はGDMのライブの説明そのものであり、②と④はGDMの基本的な教え方である。GDMを活用することが、新学習指導要領が求めている授業改善の方向と同じであり、効果的であると言える。

4. どんな授業改善が有効か

報告書(P67)で、「新学習指導要領では新たに仮定法が文法事項に加えられた。それによって更に表現の幅が広がる。語や文法事項が増えたことで表現できる内容が増えた」とらえて、有効に活用したい。」(下線部筆者)と述べられている。新たな文法事項は仮定法のほかに現在完了進行形、原形不定詞、S+V+O+that / what 節などがある。扱う語彙数は現在の1200語から2500語まで増やされる。下線部で言われている「表現できる内容が増える」のが「表現力が増す」ということに単純につながっている現場の教師はまずいない。文科省は時制や人称、文構造の理解がある程度定着しているという想定で仮定法などの文法事項を増やした。しかしその後の調査の結果は「予想をはるかに下回るもの」で、その前提条件が崩れてしまった。その結果、学習する語や文法事項が増やしたので表現力を一層つけることができると言いたかったが、「有効に活用したい」という指摘に止めざるを得なくなった。

前述したように教科書の指導では、現在形の文をまず学習し、つねに現在形と比べながらいろいろな時制表現(アスペクトの進行や完了もここでは時制とまとめる)を習っていく。これが実は時制表現の理解ができていない大きな要因となっている。GDMではテーブルから物を取るという動作について、He will take his bag off the table. / He is taking it off the table. / He took it off the table.の3つの場面があり、今ほどの場面かを常に考え、選択して発言する。

この take から始まり、put 次に give そして go を同じように3つの場面の使い分けを学習する。これらの動作と関連して、人や物の存在について is / am / are で表す場面から was / were の場面、そして will be の場面と使い分けを増やしていく。その後、動作の3つの場面 will take / taking / took に現在形の表現を付け加える。この現在形を付け加えて教科書の指導につなげる方法については Year Book No.64「GDM と教科書のマッチング — 動詞の扱い方 —」で詳しく述べた。

GDM を活用して一般動詞の4つの使い分け（未来、進行、過去、現在）と be 動詞の3つの使い分け (is / am / are ・ was / were ・ will be) を1年で学習するのは時制の理解にとっても効果的である。2年で学習する過去進行形では、GDM で学習した生徒の He is here. ⇒ He was there. ⇒ He was in the park when I called him yesterday. ⇒ He was playing tennis in the park then. という場面を確認しながらの思考の流れと、He plays tennis every day. ⇒ He is playing tennis now. ⇒ He played tennis yesterday. ⇒ He was playing tennis then. のように every day とか now といった書き換えのキーにあわせて動詞の形を変えていく指導では、どちらが実際の場面で有効か、すなわちコミュニケーション能力をつけていくことができるか明らかである。He is here. が定着しているから、He will be there. が分かり、そこでどんな様子かを言いたくなって未来の進行形の文を言う方が、一般動詞の現在形の文からスタートして考えるよりはるかに早く正確に発話できる。新しい文法事項の現在完了進行形も同様である。教科書にはない It is here / there. から学習するのが GDM の大きな魅力のひとつであり、GDM を取り入れる理由でもある。この一見なんでもない3語の文がとても大きな力を持っており、英語学習の入門期においていろいろな点で重要であることを知ってもらいたい。

このように基本的事項の定着が不十分な状況での語彙数の倍増、文法事項の増加、中学校の教科書と文法的にきちんと接続していない小学校の教科書（接続してなくて教科と呼べるのか疑問であるが）これらのことに加えて評価の観点が大きく変わるなど、2020年代の英語教育の先行きは、残念ながら不安のほうが大きいのと言わざるを得ない。

筆者は昨年の Year Book No.71 で「2019年度までの数年間は全国の99%以上の小学校の外国語活動で、Hi, Friends!か We Can!が使われているという状況になっており、これら2つの教材は授業では実質的に教科書であり、日本じゅうで1種類の教科書だけで英語教育が行われているということになる。たとえその教科書がどれだけ優れていたとしても、日本全国でその教科書しか使われていないというのは、おかしなことであり、恐ろしいことにつながる可能性もある。しかしこの異常な状況について言及されることは、今までほとんどない。少なくとも筆者は見たことがない。」と述べた。最近次のような記事を見かけたので紹介したい。

英語教育雑誌の小学校英語に関する連載で⁴⁾松川禮子岐阜女子大学学長は、教科化スタートに当たっての解決していかなければならない課題について述べている中で「教科書採択はすでに結果が出た。いわば国定教科書であった外国語活動や移行期の教材を、基本的に踏襲したものが多くのシェアを占めたのは、当然予想された結果であろう。」と We Can!のことを「国定教科書」と表現している。

また小泉清裕昭和女子大学附属昭和小学校前校長は次のように述べている⁵⁾。「新しく教科書ができましたが、この教科書はまだ誰も使用したことのない未知の教科書です。本当にこの教科書が（略）小学校教育の一環として意味があるのか、（略）児童の知的なレベルに適応して

いるか（略）など，できるだけ細かく教科書の「評価」をする必要があります。（略）時代は多様性を求めているにもかかわらず，（略）7種類の表紙の We Can!が誕生したとしか思えないのが非常に残念です。実践を通して，先生たちが多様性のある授業を展開して，それを教材化するように教科書会社に伝えることを願っています。文科省も教科書会社も現場の声を『天声』として真摯に捉えるべきです。」（下線筆者）長い間にわたって小学校英語を実践してきた小泉氏のこの指摘はとても重要で傾聴に値するものである。

注

- 1) 令和元年7月に文部科学省の国立教育政策研究所から出され，HPでも公開されている。
- 2) Year Book No.69（2017年）代名詞の指導順序の重要性～GDMと教科書を比べて～
- 3) Year Book No.71（2019年）スタート目前の小学校英語科～その言語材料と言語活動～
- 4) 英語教育（大修館書店）2020年2月P25
- 5) 英語教育（大修館書店）2020年2月PP12-13

Básic English 研究の一視点

空間詞 ON と OFF

後 藤 寛

まえがき

われわれは日常生活で常にモノの「取り付け」と「取り外し」を行っている。家庭のエアコン、洗濯機、冷蔵庫、テレビ、照明器具、パソコン印刷機のインク、車のバッテリー、さらには日常的な衣類の着脱、等々、取り付けと取り外しの例を挙げれば限りがない。このモノの着脱はある種の取り替え (change) でもあるが、実はここにも整然とした構造がある。この種の日常的な方法 (daily routine) のなかにも、スイスの F. de Saussure (F. ソシュール) [1857-1913] に始まった structural linguistics (構造主義言語学) との接点を見ることとなる。

社会現象・社会思想としての structuralism (構造主義) は元来が linguistics (言語学) を母体とするが、この人間社会にあるものは structure (構造)・system (体系) であり、部分 (part) と全体 (all) の織り成す整然とした order (秩序) ある調和感の下、encoding (コード化) された「和」(harmony) ということになる。日本は目下「令和」(公式英語訳は Beautiful Harmony) の時代であるが、beautiful な harmony は筆者には実感として把握しにくい。happy な harmony (Happy Harmony) なら社会現象としてもよく見えてくる「和」となる気がする。

structuralism, そして今日的な post-structuralism (ポスト構造主義) 的な semiotics (記号論) は人間社会での言語のみならず、日常的な衣食住にも構造・体系・秩序・調和の pattern (パターン) がコード化され編み込まれていると見る。social linguistics (社会言語学) の研究対象である。pattern は patron (パトロン) などとも同系語で「規範、手本」の原義をもつが、本稿では「衣」(clothing) の視点から、Básic English という制御言語 (controlled language) の和 (harmony) の一端を垣間見てみると同時に、英語の入口 (the way in) ではなく一貫した筆者の関心事である出口 (the way out) を見定めたい。この出口となる C. K. Ogden の Básic English 言語哲学は orthology: the science of the right use of words (純正学/純正語法論) ということになる。これは英語の奥義であるがゆえ、熟達するには相当な努力と年季がいり、入口には入れても出口には決して簡単には出られないものとなっている。

1. モノの「取り付け (ON)」と「取り外し (OFF)」という考え方

モノの「取り付け」と「取り外し」という面から、特別に「衣類・衣服 (clothing) の着脱」というわれわれの日常的な行為・しぐさに着目すると同時に、英語/Básic English で語形変化のない空間 (不変化) 詞 (spatial particles) のうちの ON と OFF に注目したい。状況的には「接触」の深層意味素 (deep sememe) 〈TOUCH〉で示されるとともに、数理的には微積分 (calculus) の考え方とも関わりと直観する。昨年の本会発行 *Year Book* (No.71) で注目した移動事象における「変化と変化の結果」という考え方ともつながる。

モノの取り付け・取り外しではそのモノが移動する。**移動事象**でのモノの移動の軌跡を〈FROM S THROUGH [PAST] P TO G〉[*S (Source), P (Path), G (Goal)] として、すなわち**起点 (S)・経路 (P)・着点 (G)**の3つから見てみる (〈THROUGH〉は〈PAST〉でも

よい)。まずは移動状況の仮説的な母型 (matrix) を深層意味素表記で次のように設定したい。

• **移動事象 (Motion Event : ME) の母型**

[FROM <HERE / THERE> α THROUGH [PAST] <HERE / THERE> β TO <HERE / THERE> γ]

これは Something makes its way from α through [past] β to γ . 「あるモノが起点 S の α から経路 P の β を経由し着点 G の γ に至る」を意味するモノの移動状況で、直示的 (deictic) な HERE / THERE で示したものとなる。たとえば文 John went to the station. He is at the station now. では起点 S も経路 P も特定されず、着点 G (ここでは the station) のみが表層上に出る例で、情報提供上の旧情報 (given information) ・新情報 (new information) が関わっている。なお、着点 G の γ の状態は be at γ now [then] で表せられる。

上の母型から派生的に3つの類型 (types) が考えられる。私 (試) 案として次に示してみる。

類型 (A 型)

(S)	P	G
(from <HERE / THERE> α)	<ul style="list-style-type: none"> • up <HERE / THERE> β • down <HERE / THERE> β 	to <HERE / THERE> γ / (at γ)

- 文例 : **From** here, **from** my fingers it is coming **up** my hand and my arm, and **to** the top of my arm. (It is (here) **at** the top of my arm now.)

(B 型)

(S)	P	G
(from <HERE / THERE> α)	<ul style="list-style-type: none"> • back (\oplus up, down, on, off, across, round, in, out, etc.) <HERE / THERE> β • up <u>and</u> down, in <u>and</u> out, etc. <HERE / THERE> β 	to <HERE / THERE> γ / (at γ)

- 文例 : **From** here, **from** the top of my arm it is going **back down to** my arm, **to** my hand, and **to** my fingers. (It is **back** (here) **at** my fingers now.)

(C 型)

(S)	P	G
(from <HERE / THERE> α)	<p>(right) / (straight) / (all the way) / (all) / (halfway) / (a little way) / (far, farther [further]) / , etc.</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> • \oplus (up), (down), (back) • \oplus on, off, across, round, up and down, round and over, in, out, etc. • (\oplus over / under, etc.) <HERE / THERE> β 	to <HERE / THERE> γ / (at γ)

- 文例 : **From** here, **from** my fingers it is coming **right back up over** my hand and my arm, and **to** the top of my arm. (It is **back** (here) **at** the top of my arm now.)

表中の括弧付けの語（句）は任意となる。状況としては A 型：まず何かモノ（=it）が指から手を伝って肩のほうへと移動，B 型：次にそれがまた戻って指まで移動し，これで一往復。この一往復で一通りの状況とはなるが，加えてもう 1 つ C 型：今度は再び元の肩の位置まで移動を起こす。そういう状況である。〈ALONG = IN LINE WITH〉（～を伝って・～に沿って）の移動経路 P 描写に特に注目すべきである。移動を起こす it は虫けらでも何でもよい。本稿でテーマとする衣類の取り付け・取り外し，すなわちその着脱からは it をたとえばジャケットの袖（片袖）と考え，それを腕に通すことを繰り返す動作（しぐさ）を想定・イメージ化すればよい。この 3 つの移動を 1 つでとらえればほぼ次のようになる。何度も唱えるとよい。

(From here, from my fingers) it is coming up my hand and my arm, and to the top of my arm, and (from here, from the top of my arm) it is going back down to my arm, to my hand, and to my fingers, and (from here, from my fingers and over my hand) it is coming right back up to my arm, and to the top of my arm. (It is back (here) at the top of my arm now.)

遠近法 (perspectives) とも関わる。起点 S (from) と着点 G (to) では，括弧付けにした S はしばしば情動的には旧情報となり特定されず，表層上には具現しない。いわゆる織り込みとなる。一方，G は一般的に新情報として表層上に具現する。移動事象 ME では S より G に関心が向くわけである。ただし，G も語用論 (pragmatics) 的に具現化しないことも多々ある。

移動事象 ME では特別に経路 P の構造型に注目する必要がある。この**経路 P の描写法**は英語での奥義 (esoteric) で，難しく，日本人の英語修得上で大きな壁である。しかし，この壁を乗り越えない限りは英語は決して満足には使えるようにならないはずである。英語のネイティブスピーカーが難なく空間描写 (spatial representation) ができるのは，この種のモデルとしての母型と 3 類型 (patterns) が脳に深く根付きコード化 (encoding) されているからだと考えられる。

A 型は移動事象 ME での経路の P 描写で up / down (上下) の空間方位を指定する型である。英語では方位が上 (up) か下 (down) かは**重大問題**で，まずはこの思考型が基本となる。

B 型は移動経路 P が逆戻り (back) の場合とともに，方位が垂直の上下 (up / down) ばかりでなく水平など，角度は 360° 変わる場合も含む。垂直方位の場合も上 (up) か下 (down) のいずれか一方とも限らず，上下/内外両方向 (up and down / in and out) の逆戻り移動もある型である。逆戻りが直線ではなく曲線を描くモノの移動の場合には，空間詞 round の重層的並列となる。たとえば回転寿司店で目的の寿司が目の前を通り過ぎてしまい，360° 回転し再び戻ってきたときにそれを取ろうと思えば I'll take that one when it comes back round. と，back とともに経路 P の round の並置となる。これは着点 G を指定する... back round here, ... back round to me などではあるが，一般には here, to me などは表層上に具現しない。

逆戻り描写の空間詞 back には特別に注目されるべきで，たとえば I am here with my hat [gloves] on. は「帽子 [手袋] を着衣した私のここでの状態」であるが，脱衣状態であったものが再び着衣状態であるなら I am here with my hat [gloves] back on. である。

C 型は A 型と B 型の折衷型であるとともに，場合によっては right, all the way, all, halfway, a little way, far, farther などで程度の意味を加え移動経路 P を描写する構造である。空間詞が 3 層で連なるが表の下に提示した文例のように，着点 G を指定する to は，経路 P を描写する空間詞とは遊離する構造型である。これら 3 つの型の各々の文例を何度も唱えるとよい。

移動事象 ME の経路 P に関しては事象的「変化と変化の結果」という見方から、昨年の本会 *Year Book* (No.71) ですでにそれなりに注目した。空間詞が重層的に並列、あるいは遊離して配列される英語に特徴的な構文を特別に重層空間構文 (multiple spatial constructions: MSC)/擬似重層空間構文 (pseudo-multiple spatial constructions: PMSC) と命名し、意味論のプレ入門書 Richards, I. A. and Gibson, M. C.(著) *English through Pictures* (EP I・II) から 36 例を抽出し、それが EP I・II (Workbooks を含め) に現れる事実上すべてであるとした。今回、改めてそのうちのいくつかを取り上げ確認したい〔下線、破線、(=) は筆者〕。

まずは以下 1) ~8) に文例を列挙するとともに、それぞれ解説を加えることとする。

- 1) Air which we take in and give out through our noses and mouths is our breath. (EP I, Workbook, p.185)
- 2) It (= the size of the sun) is 864,000 miles through from one side to the other. (EP II, p.75)
- 3) They (= some mines) go far down into the earth. (EP II, p.122)
- 4) He is shaking it (= the other end of the cord not fixed to a tree) up and down. (EP II, p.134)
- 5) With every shake he sends a wave down the cord to the tree. (EP II, p.134)
- 6) He went out of the house and down the front steps to the street. (EP II, Workbook, p.191)
- 7) The city* has a great harbor with ships coming in from everywhere. (EP II, Workbook, p.198) (city*: un-Basic word)
- 8) The apples coming down off the branch are in motion. (EP II, Workbook, p.247)

これらの文例により移動事象 ME のおける起点 S・経路 P・着点 G を確認するなかで、それぞれ下線と破線の語(句)に特に注目すべきである。どれも日本人には難しく、スラスラとは使いにくいはずである。EP ではこれらが頁を飛んで提示されるので現実には身にはつかないだろう。空間詞は語形変化なしで固定しているが、これが単層ではなく重層で表出する構造(上記 MSC / PMSC) で、特に移動経路 P の描写が日本人には難しい思考型となる。

1) では空間詞 in と out が and を挟んで現れる。そしてさらにもう 1 つ経路 P の象徴的な空間詞 through が並列されるが、この文を理解するためには in の後ろにも through our noses and mouths を補い Air which we take in through our noses and mouths と考えることとなる。

2) の文は経路 P の through の後ろが意味的 2 分割線となるが、through で「直径」の意味となり、それを測定する起点 S と着点 G がそれぞれ from と to で指定される。

3) は鉱山を下向きの方角 (down) で特定するとともに、far でその深みの程度を強調、そして経路 P の into (< in + to) から着点 G の the earth を指定する描写である。

4) は空間方位の上下 (up and down) を一括描写する言い方で、方位が移動経路 P, 着点 G が it = the other end of the cord となる。起点 S は cord (紐) を持った「手」ということになる。

5) は a wave が the cord を〈ALONG〉の状態に伝えているのであり、the cord が経路 P, the tree が着点 G である。この描写法がまたも日本人には難しいのである。関連して、同上 *Year Book* で筆者独自に別途、文例も提示したのでそれも改めてここで引き合いに出しておくが、i) The plane was coming down the runway to take off. ii) The plane was coming down to

the runway to make a landing.はどう違うかである。大いに違う。i) は飛行機が離陸するため滑走路に接触した状態（滑走路を伝った〈ALONG〉の状態）で移動していたのであり、ii) は飛行機が着陸するため滑走路とは非接触状態（滑走路へ向けた〈TO〉の状態）で下りてきていたのである。i)での経路Pはthe runwayであるが、ii)では方位が下向き(down)で空中が経路Pとなる。この違いを明確にする必要がある。

6) は単に「彼は家から出て、玄関の階段を下り、街路へと向かった」という意味ではあるが、この移動状況も明確にイメージ化できるようにならないと使いこなせない。やはり日本人には難しいはずの描写法となる。起点S、経路P、着点Gはそれぞれthe house, the front steps, the streetで、それが空間詞out of, down, toにより指定される描写法である。

7) はwithによる付帯状況(attendant circumstances)の描写とともに、空間詞のin, fromが並列されている。移動の起点Sはfromで導かれているeverywhere、経路Pはinに含まれ、着点Gはharborである。S→P→Gが逆のG→P→Sの配列となる文例である。

8) は空間詞downとoffが並列する。移動状況は起点Sがbranch、経路Pが引力の法則で木から(off the branch)落ちるリンゴの下向き方位downでのその移動中(in motion)の位置、着点Gは地面のthe earthなどということになる(cf. Apples come down onto the earth)。

ここで別途、移動事象MEでの特に経路Pの描写法を語句整序で確認してみることとする。やはり漫然と英語を見ているのではなく、こういう形で語配列法の正しい結果を出していくのがよい。①～③のそれぞれ括弧内の語(句)はどのような整序となるか？

① With [down, hat, her, pulled] low, she gave a look [across, at, out, the field] them.

「彼女は帽子を深くかぶり」 / 「野原のはるか向こうの彼らを見た」

② I was heading [down, the, way, wrong] the mountain then.

「私はそのとき山道を間違って下っていた」

③ He is putting [his pockets, into, out of, the bag, things].

「彼はポケットからモノを出しカバンに入れている」

正解は①her hat pulled down / out across the field at, ②the wrong way down, ③things out of his pockets into the bagでしぐさや情景の描写であり、身体部位はいずれも明示化されていないが①手と目, ②足, ③手である。①の前半は付帯状況で、帽子の取り付け(着帽)状態である。なお、③は(×)things into the bag out of his pocketsとは言えない。起点Sのout of her pocketsが先で、経路Pのinto (<in + to), そして着点Gのthe bagの語配列となる。

焦点は定まってくる。われわれの日常的なモノの「取り付け」と「取り外し」行為のうち、衣類の着脱行為では移動物は衣類(clothes)であり、身体部位(parts of the body)がその移動の起点(S)・経路(P)・着点(G)として関わる。状況的には取り付けはfixedの状態、取り外しはunfixedの状態でもあるが、衣類の取り付け・取り外しは衣類と身体部位が連続しつながる接触状態(touched)か、不連続となる非接触状態(untouched)かということになる。この2つの状況はそれぞれ英語では空間(不変化)詞(spatial particles)のONとOFFで象徴される。

なお、EP I～Ⅲでの全部で30個の空間詞の提示順序はinが最初で、それからon, off, to, of, at, after, from, with, ...の順での展開となるが、これら一連の提示順は再考の余地があろう。

2. 衣類の「着脱」：着衣 (PUTTING Y ON Z) / 脱衣 (TAKING Y OFF Z)

本節ではモノの取り付け・取り外しという視点から、衣類・衣服のわれわれの日常的な「着脱」行為へと焦点を定める。身体を包む衣類はすでに示唆したように structuralism (構造主義)・post-structuralism (ポスト構造主義) の注目するところで、フランスの Barthes, R. [バルト R. (1915-1980)] 著 *Système de la mode* (1967) [佐藤信夫・訳 (1972)] 『モードの体系—その言語表現による記号学的分析』などは、日本でもよく知られる研究書の1つである。衣類・衣服は純粋に実用性・機能性とは別にモード・ファッション性が絡むが、これはすべて意味をもつ言語記号となる。cosplay (<costume + play) 「コスプレ」という語も英語となった。

衣類・衣服 (clothing) はわれわれ人間の身体を包むものであるが、帽子・靴・手袋など、また指輪・ネックレス・サングラス等々の装飾品を含めた「服装」と「服飾」のトータルなもので、これがモードとなる。近年、特別にファッション性を重んじたオーダーメイドの衣服とともに、より実用的・機能的なレディメイドの衣料品のアパレル (apparel) 産業が盛んである。ついでながら apparel といえば、intimate apparel という言い方も英語にある。肌にかかり取り付ける「肌着類」のことであるが、いわゆる lingerie (ランジェリー) の意味ともなる。なお、lingerie は Basic 語の linen, line などと同系 (paronymic) の語であることも付け加えておこう。

われわれは日常的にこういうものを身体の部位 (parts of the body) に取り付けたり (don < DO+ON), 部位から取り外したり (doff < DO+OFF) して生活している。衣類の着脱動作はしぐさ (act) であり、これには必ず hand, arm, leg, foot など身体の部位が関わる。身体部位と身体全体は、まさに部分と全体の関係で、衣類の着衣と脱衣は部分 (part) と全体 (all) を関連づけるわれわれの最も身近な日常的行為ということになる。これを英語と絡めて考えるとよい。

なぜ人間は衣類を身に付けるのか? 旧約聖書では天地創造の神が The Garden of Eden (エデンの園) で裸であった Adam と Eve に動植物の皮・繊維でできた衣を与えたのが最初であった (「創世記」3:21)。上で実用性とファッション性を挙げたが、他に儀式性もあり、権威の象徴ともなる。investment (投資) という語がある (Basic ではプラス α 語である) が、これは「衣類を身につけること」が原義で「衣装で着飾り資産家ぶること」の意味をもつ語である。人間の衣類は社会的慣習から決まってもいて、社会制度の下でコード化 (encoding) されている。dress code (服装規定) という言葉もある。昨年10月に皇居・宮殿で執り行われた新天皇 (令和天皇) の厳粛な即位礼正殿の儀で、安倍首相夫人が1人だけ和服姿ではなく膝の見える短いスカートを履いていて、dress code の観点から何かと非難もされた。

なお、costume (衣装) と custom (慣習) は形態音素形 (morphophoneme : MP) から同系語の関係にある。また、habit には慣習としての「服装」の意味もあるし、habiliment も同じ意味である。まさに構造主義である。実は rehabilitation (リハビリ) も同系語で、これは「再び衣装を身につけさせること」が元の意味であった。言語も社会的一慣習である。

衣類を取り付けた状態にし、それをファッションショーとしてモデル (fashion model) がモード (mode)・着こなし方を人に見せることを専門とするショービジネスがある (model, mode は同系語)。また一方で、取り付けではなく、身体の部位から衣類を取り外すことを見

せるビジネスもある。女性が脱衣し、身体の部位を見せる興行物としてのショービジネスである。衣類の脱衣行為で展開する文学作品 (literary works) もあり、いわゆる pornography がそれである。これは 18 世紀半ばにイギリスで刊行された小説 *Fanny Hill* (1750) [John Cleland 著] に原点がある。性的な隠喩 (metaphor) の宝庫で今日も広く読まれている作品である。

今日的な generative semantics (生成意味論) では **Lexical Conceptual Structure : LCS (語彙概念構造)** を示すことで語の意味分析を行うが、おおよそ次のようなものとなる。

LCS : []_x ACT-ON []_y CAUSE [BECOME [[]_y BE-AT-[ON/IN/WITH] []_z]]

これは原始意味述語 (primitive semantic predicates) を用いて示した構造型で、〈**x** が **y** に働きかけ、その結果 **y** は **z** の状態に変化する〉を意味する。変化と変化の結果状態である。

衣類の着衣と脱衣の場合、着衣を意味する代表的な語 wear と脱衣を意味する undress, undo, remove, divest, strip, etc. から代表的な語 undress を LCS で示せば次のようなものとなるろう。

- wear (着る) : BECOME [[CLOTHES]_y BE-AT- [ON] [PART OF THE BODY]_z]
- undress (脱ぐ) :
 - i) BECOME [[CLOTHES]_y BE [NOT-AT-[ON] [PART OF THE BODY]_z]]
 - ii) BECOME [[CLOTHES]_y BE-AT- [OFF] [PART OF THE BODY]_z]

「脱ぐ」の意味での undress は、i), ii) と同じことにはなる。すべて**定項 (constant) の z は PART OF THE BODY (身体の部位)** であり、この定項に具体的な部位名が語彙化され編入 (lexical incorporation) される。語 (word) が生成され、そしてこれが統語上への投射という形で文 (sentence) となる [本会・東支部用 *Newsletter* での目下連載中の拙稿 (2019 年 7-8 月号/9 月号) など参照]。こういう LCS 分析法は必然的に Basic による表現法にも磨きをかけてことになる。身体の具体的な部位は Basic 語なら、上ですでにいくつか例を出したが HAND, THUMB, FINGER, HEAD, ARM, LEG, FOOT, EYE, NOSE, MOUTH, EAR, FACE, TOE, KNEE, NECK, CHIN, CHEST, BACK, etc. ということになる。

なお、undress の接頭辞 un-には留意が必要で「脱衣する」の意味と、場合によっては単なる否定の「正装しない、しかるべき服装をしない」の意味となる。両義 (double entendre) の性質をもつ語である。undressed であれば「衣類を身に付けていない (裸である)」と「正装していない」の両義となる。また、衣類の取り付け・取り外しは広義には身体の部位ばかりでなく、衣類そのものへの付属品・装飾品の取り付け・取り外しも含むこととなる。たとえばシャツ・ズボン等の付属品としてのボタン、ファスナー、金具、紐 (ひも) などの留め・外しであれば button, unbutton / hook, unhook / zip, unzip / clip, unclip / tie, untie などとなる。衣類は取り付けの「着衣」が無標 (unmarked) で、取り外しの「脱衣」が有標 (marked) である。そもそも衣類は目的からして身体に取り付けるものだからである。

一連の衣類の着脱で着衣は 〈PUTTING Y ON Z〉、脱衣は 〈TAKING Y OFF Z〉という意味素 (sememe) としても示される構造型をもっている。ここでは衣類 (CLOTHES) が Y で、身体の部位 (PART OF THE BODY) が Z である。また Z の身体の部位が明示化されず織り込み (implicit) で言外の意味となる場合は、簡素化し 1 つにまとめた意味素 〈PULLING ON / OFF Y〉でも表せられる [例, I am pulling on / off my raincoat.]。ただし、Y が代名詞の場合は 〈PULLING Y ON / OFF〉となる [例, I am pulling it on / off.]。pulling は on / off 以外

に派生的に up, down はもちろんのこと, across, round, over, etc.とも共起する。ニュアンスとしては、やや力を入れ引っ張る感じでの衣類の着脱となる。さらにこれは付帯状況の場合の〈(WITH) Y (PULLED) ON / OFF Z〉という構造型とも平行する。with, pulled は表層上に具現しない場合もある〔例, (with) my sunglasses (pulled) up on my head.〕。

前節で触れた意味論のプレ入門書 EP は衣類とその付属品 (服飾), 身体の部位などに特別に注目する。気づかれないがこれが EP の 1 つの隠れた特色と言える。最初に導入される服飾は hat (帽子), 身体の部位は hand (手) で thumb (親指) と fingers (指), そして head (頭) がこれにつづく。hat は hood (頭巾), heed (注意を払う) などとも同系語で原義は「覆うこと」である。hat は本来が身体の部位の頭を覆うもので、見せるものではないことになる。ここでは EP (Workbook) からドレス (dress) の仕立てに関する 3 例をまずは日本語で示し、それからその原文 (Basic) を下の 1)~3) で確認してみる。

1) 私はハサミを使って〈ボタン穴〉の真ん中に細い切れ目を入れています。ほら、開いたでしょ。2) ドレスの布に針と糸を通してあります、今度は針がボタン穴に通っています。3) マリーのドレスはかなり丈が長いので、ここにいる女性が針と糸でその丈を詰めます。

これが EP II (Workbook) で次のように Basic で示されている〔下線, (=) は筆者〕。

- 1) I am making a narrow cut down the middle of this one (= buttonhole) with the scissors. There! It is open now. [EP II, Workbook, pp.220-221]
- 2) I am putting a needle and thread through the cloth of the dress. Now the needle is going through a hole in the button. [EP II, Workbook, p.221]
- 3) Mary's dress is very long. The woman will take it up with a needle and thread. [EP II, Workbook, p.269]

日本語を介すると、しぐさと英語が一体化し脳に刷り込まれる。同時にしぐさにはすべて身体の部位が関わるが、すでに例を見たがそれが明示的 (explicit) に表層に現れるとは限らない。実際には非明示的 (implicit) に文中に編み込まれる場合のほうが多い。この 1)~3) の例では身体の部位はすべて非表示であるが、それは指 (thumbs / fingers) と手 (hands) ということになる。次に創作文例として、4)~12) のようなことを Basic 英語でどう言い表すかである。

4) T シャツの一番上のボタンが外 (はず) れている (掛かっていない) ので留めておこう。5) 脱いだ靴の片方をもう一度履いてみよう。6) このセーターは背中のところ少し緩い。7) あのドレスは前ボタンで、横のところにはファスナーが付いている。8) この長靴は履くより脱ぐのが難しい。9) ここにあるパジャマの 2 番目のボタンがとれそうだ。10) このズロース (ズボン下) は膝の後ろのところきついので、このあたりを下へ向けて少し広げてもらえますか? 11) 彼は襟巻きをし、長い毛織のシャツを腰の後ろに垂らして歩いていた。12) 今日、彼女はゆったりとした着物姿ではなく、やや長めで細身のスカート履き黒い網タイツの姿である。

すべて Basic で考えれば、たとえば次のようになろう。

- 4) The top button on my T-shirt is undone, and I'd better keep it done up.
- 5) I'll put the shoe back on.
- 6) This pullover is a little bit loose down the back.

- 7) That dress is buttoned down the front, and it is hooked at the side.
- 8) These boots are harder to take off than they are to put on.
- 9) The second button on the night clothes here is coming off.
- 10) These drawers are tight at the backs of the knees. Will you let them out a little down here?
- 11) He was walking with his neckcloth knotted round over his chest and his long wool shirt pulled down over his lower back.
- 12) Today she is not in her loose kimono dress, but in her pencil skirt stretched tight across her backsides and in her black fishnet stockings

上の4)で「外れと留まりの状態」を、一般性のあるdoからのundone, done upとしておいた。5)でのbackは重要。7)の「ファスナー」をfastenerとは英語ではまるで言わない。「チャック」をchuckとはまったく言わない。「ファスナー」「チャック」は英語では常識的にzipperであるが、ここではBasic語hookで考えてみた。zipperはzipからで、擬音語(onomatopoeia)である。音感として感知するとよい。「前ボタン」のis buttoned down the frontに対し、is buttoned up to the neckなどの言い方もある。身体や衣類の狭い部位は一般には空間詞atとなる。10)でのatも同様。11)は付帯状況の文例。12)では身体の部位をbacksides(尻)としておいた。backside(s)はよく用いられる。seatでもよい。なお、元はskirtもshortも「切ること」が原義の同系語(paronym)で、その原義からすればskirtは切った短いものが本来となろう。1960年代のフランスの服飾デザイナー・G.シャネル(G. Chanel)風の膝丈(knee-length)のもの(Chanel-length?)以前の、伝統的な女性のlong skirtは本来でない妙なもの?

なお、衣類には考案者などの人名に由来するものがいくつかあることも心得ておくといよい。cardigan(カーディガン), leotard(レオタード), bloomers(ブルマ)などはそうである。

取り付け/取り外しの衣類の着脱は、身体との接触状態(ON)/非接触状態(OFF)とすることから必然的にきつい状態(tight/fixed)か、緩い状態(loose/unfixed)かも感心事となる。上の4)~12)はどれも身近な例で、こういう自分にまつわる日常品の衣類とその着脱に関する小さな表現をいくつも取り込み、英語で言える幅を広げるのである。自分の社会的存在をI am John, I am here.と言う場合のIは衣類(Y)をまとった自分であり、I am John, I am here with Y on.ということのはずだろう。I am John, I am here with nothing on.ではない。

手(hands), それも特に指(thumbs, fingers)でのしぐさを英語でスラスラ描写できればよい。モノづくりの職人(artisan)は指の触覚で作業を覚えるが、英語で最も年季と熟練を要するのがしぐさや、それに伴う空間状況の描写である。手芸(handicraft)としての衣類の編み物作業(knitting)などを介し、指の触覚で英語を文字通り編み出していく方法もある。knitは身体の部位ではBasic語のknee(膝)と同系である。さらにBasic語のknot(結び目)も同系。un-Basic語ではkneel(ひざまずく), knuckle(げんこつ), knock(こぶしで叩く), knob(ドアなどの取っ手), knead(練る・もむ)などが同系。**形態音素形(MP)**は/GEN(U)/で、初頭子音音素は無声の/K/ではなく有聲の/G/であった。原義は「丸くなった節目」である。

広く衣類の仕立て方(dressmaking)を説き、モノづくりが動作(しぐさ)として実感できるものにSeton, D. and Parker, W. C. (1970)があり半世紀前になるが筆者はこれに大いに注目

したことを思い起こすが、dressmaking は一般には婦人服の仕立ての意味である。紳士服の仕立ては tailoring と言う。しぐさと付帯状況の英語描写は文学作品がその宝庫で、文中に編み込まれている身体の部位とモノとの接触 (ON)・非接触 (OFF) 状態を意識し、イメージ化するとよい。非言語コミュニケーション (non-verbal communication; kinesics; body language) の問題とも絡む。特別に E. Hemingway の作品 (小説) は心理描写が極力排除される一方で、情景や人物の装い・着こなし・しぐさがきめ細かく織り込まれ、その編み目が見えて参考となる。

衣類・服装・服飾に関わる次の 13)~16) の創作文例を、やはりすべて Basic で考えてみる。

13) Who is the man out there with the collar of his overcoat rolled up over his neck?

14) He got out of the water, his swimming shorts pulled up at the tops of his legs.

15) I was in my new leather shoes. They were not the right size. The parts covering the toes were narrow, rubbing as I went on foot, so that every step was a pain.

16) I am pulling on [putting on] my blue cotton work trousers, now the top coming up from one of my feet, then up over my knee and my upper leg. And then from the other foot it is coming up, then coming halfway up round my leg, and now it is coming right up round to my stomach. The top is round my stomach now. I am here with the top round my stomach. I've got the front part hooked up.

I will be pulling them off [taking them off]. Undoing the hook at the front, I will get them pulled back down. I've got the front hooked down. They are now going back down over my stomach, upper legs and farther down to my knees, to my feet.

They are all the way back down at my feet now, and I am stepping out of my trousers I got at a clothing store in Harajuku, Tokyo. They are now down and off.

13) は外にいて、オーバーの襟を立てている男の付帯状況描写である。rolled up over は他の Basic では folded up over でもよいし、pulled up over でもよい。逆に衣類が「捲くり下げである」状態であれば rolled down over, folded down over, pulled down over などとなる。

14) は彼が水から出てきたとき、水着が股座までずり上がっていたということで、これも付帯状況描写である。ここでの「股座までずり上がり」は pulled high up between などでもよい。

15) はサイズが足に合わない新しい靴 (革靴) で、つま先が狭く、歩くと擦れて痛かったというわけである。ここでの身体の部位は toes (つま先) と、「歩く」では単数形の foot (足) である。

16) はジーンズの着衣・脱衣 (on and off) を遠近法 (perspectives) との関わりから手順を追いかけて描写するもので、前節で提示した移動事象 ME の母型と類型からモノの移動を起点 S・経路 P・着点 G として把握できよう。末尾の語 off の後ろには着点 G の my body は明示化されず織り込みとなる。ON/OFF は IN/OUT にもつながってくる。MSC/PMSC となるこの類のことが淀みなくスラスラ言えない限りは英語は決して本当には実感できないはずである。

なお、衣類 (Y) の着脱 pulling Y on [off] で、元々身体の部位にあったもののたくし上げ [下げ] の平行移動は pulling Y back up [down] で、on/off は共起しない。touched 状態か untouched 状態かが関わる (文中の I will be pulling them back down. の例参照)。また、pulling Y up [down] at the front [back] であれば「Y の前 [後] の部分のたくし上げ [下げ]」とな

る。pulling は他の Basic 語 slipping, pushing, getting など, un-Basic 語 sliding, tugging などともなる。ついでながら, jeans (ジーンズ) は 19 世紀半ばのアメリカ西部開拓時代に起源はあるが, 生地そのものはイタリアの港町 Genoa (ジェノア) から渡り, その地名に由来するとされている。

最後にもう 1 つ次の 17) の Basic 創作文例を基に解説を加えてみる。

- 17) The man was seeing up the young woman's skirt on the steps in a Tokyo station and was taking a picture of her backside clothed in her underthings. He was questioned by a watchman then and there, and later on taken to the *police* office near the station. (*police* : international word in Basic)

衣類・衣服には見える上着ばかりでなく, 見えない下着 (underclothes) に特別な関心が向けられることもある。近年はスマートフォンなどで簡単にどこでも動画での写真撮影ができ, 女性が屋内外で盗撮される報道を頻繁に見聞きする。今日の世相を反映する出来事なので一度は触れておきたいと思っていたことであるが, この行為は英語では see [look, peek, peep] up her skirt と言う。have [take] a look up her skirt とか, get [have] a view (straight / right) up her skirt などとも言え, Basic でもある。語として名詞・形容詞で upskirt もすでに用いられる。いずれにせよ, <to SEE [LOOK] UP one's SKIRT / to GET [HAVE] A VIEW UP one's SKIRT> の構造型となる。経路 P の意味素 (sememe) としての <ALONG / IN LINE WITH> が関わるが, これも前節での移動事象 ME の **母型**, また A 型~C 型の 3 **類型** パターンから説明できる。ここでは下から上への方位 (up) として skirt の内部が経路 P となる。(×) look into her skirt とは言わない。get [have] a view (of her clothes) under her skirt などとは言える。

関連して get his hand to her skirt, get his hand up and down (under) her skirt などと言うと, また別の卑猥行為を意味する。前者の get ... to は移動の意味素 <FROM / TO> から着点 G が指定される (cf. 状態の意味素 <AT>)。後者は継続・持続の意味となる。under なしの場合は, hand が skirt の表面の上下を接触状態 <ON> で伝う意味素の <ALONG> が加わる。上の 17) の創作 Basic 文例は盗撮容疑でガードマンに現場で捕まり警察署へ連行となった男性の, 衣類で隠された女性の身体の一部 (body parts) とそこに取り付けられた underclothes への関心である。なお, 形態音素形 (MP) からも fetish, fetishism (フェチ) は fashion (ファッション) と同系の語である点には注目されておいてよい。「(心の中で) 作り出すこと」が原義である。

見てきたように英語思考では空間方位が **上向き (UP)** か **下向き (DOWN)** か, また, 前向きか後ろ向きかでは **後ろ向き (BACK)** が前向き (front, forward) を旧情報 (given information) にした **新情報 (new information)** として重大な関心事となる。移動の経路 P 思考である。

取り付け (ON) と取り外し (OFF) をするモノのうちの私的な「衣類」が, 何かと人間社会で他人とのつながりをもつ。「衣類」を意味する語で韻文用語のプラス α Basic 語に *robe* があるが, これは rob (盗む) と同系語 (paronym) の関係にある。歴史的に追い剥ぎ (robber) が, 人から剥ぎ取った分捕り品としてのものが衣類の *robe* であった (cf. 新約聖書「使徒行伝」20 : 33)。

あとがき

われわれの日常的な衣類 (clothes) の着脱 (on and off) 行為は、身体の部分 (parts of the body) と身体全体 (body as a unit) を関連づけることだという考え方、さらにそれをしぐさ (act)、また Basic English の方法と絡めた連立方程式を解くべく何かと思索していた何年も前のある日、影山 (1980) の衣類・衣服の着脱に関する語彙分析研究があることを偶然知ったことを思い起こす。元々、筆者独自に考えていたテーマであったが有益な研究分野だという確信も得た。

影山 (同) はモード/ファッション (mode / fashion) という形でも現れる衣食住の「衣」の社会的側面・諸相 (social aspects of clothing) から見る structuralism / post-structuralism (構造主義/ポスト構造主義) 的な semiotics (記号論) の問題までには立ち入っていないが、本稿では背景にフランスの R. Barthes (R. バルト) の post-structuralism の思想を意識した。F. de Saussure 風のいわゆるシニフィアンとシニフィエの問題を含め、身近な英文モード雑誌 (*Cosmopolitan*, *Vogue*, etc.) の textual analysis (テキスト分析)・rhetoric (修辞学) 的研究からもある種の「和」(harmony) が発見されよう。今後の発展的な研究が望まれる。まさに文字通り「身に付く(着く)英語」の研究である。

確認しておくが本稿の衣類着脱の趣旨からは、Richards, I. A. の *The Pocket Book of Basic English* (1945) [今日の Richards, I. A. & Gibson, C. M. の *English through Pictures* (EP I・II)] は、帽子 (hat) の着脱を振り出し (EP I, pp. 15-16) として展開されたものと言える。

最後に、 $A=B, B=C \rightarrow A=C$ の演繹的 (deductive) で、三段論法的 (syllogistic) な謎掛けを1つ出しておこう。衣類はデザイン [design (de+sign)] 化されるが、「衣類・衣服 (clothing) と掛けて何と解く?」, 「structural linguistics (構造主義言語学) と解く」, 「その心は?」 \rightarrow 「人間の身に付ける衣類・衣服はすべて意味をもつ言語記号 (linguistic signs) である」。

参考文献

- Barthes, R. (1967) *Système de la mode*. [佐藤信夫・訳 (1972)] 『モードの体系 — その言語表現による記号学的分析』みすず書房
- Barthes, R. (1967) *The Fashion System*. [Translated by M. Ward and R. Howard (1990)], University of California Press.
- 後藤 寛 (2005) 「移動事象の関数構造と高次言語 BASIC ENGLISH」研究紀要 No.13, pp.8-19. 日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)
- 後藤 寛 (2006) 「記号論と Basic English: 構造主義の視点から」研究紀要 No.14, pp.1-12. 日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)
- 後藤 寛 (2016) 『必携 最小限の語彙力で英語を読み、聴く方法: 基礎語からの類推』(*Getting the Root Sense of the Basic Words of English*) 松柏社
- 後藤 寛 (2018.06-) [目下継続連載中] 「語釈: インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 — *A Basic Way of Reading Trump-Language*」本会 (東日本支部用) Newsletter.
- 後藤 寛 (2019) 「Basic English と自修本としての '*English through Pictures*」」*Year Book* No.71, pp. 20-31. GDM 英語教授法研究会/日本ベーシック・イングリッシュ協会

- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』 松柏社
- 小林祐子 (1991) 『しぐさの英語表現辞典』 研究社
- 西村知子 (2015) 『編みもの「英文パターン」ハンドブック』 東京書籍
- Richards, I. A. and Gibson, C. M. (2005) *English through Pictures* (Bks I, II & III). Pippin Publishing, Toronto.
- Seton, D. and Parker, W. C. (1970) *The Complete Book of Home Dressmaking*. Beagle Books, Inc., New York.
- 山田登世子 (2011) (編訳) 『ロラン・バルト モード論集』 筑摩書房

4 コマの絵と英文でつくる ― 作品を読む視点, 書く視点

吉 沢 郁 生

GDM のクラスで、「絵と英文で 4 コマのストーリーを作りなさい。」という指示による作品づくりを行ってきた。

似たような発想による実践はこれまでも行われている。例えば立花千尋氏は、「4 コマ漫画の創作」という実践を中学生に対して行った。次のようなステップを踏み、念の入った指導をされている¹⁾。

- 英語の 4 コマ漫画を読ませてストーリーの構成に注目させる。
- 次に、構成練習として、ある 4 コマ漫画を取り上げ、吹き出しを空白にして、合ったセリフを作らせる。
- そして、導入部分を与えて自分なりの 4 コマ漫画を完成させる。

私の場合は、ずっとシンプルである。次のようなステップである。

- 用紙を配り、「絵と英文で 4 コマのストーリーを作ってください。」と指示する。
- 書きつつある生徒の様子を見てまわり、必要に応じてアドバイスをする。
- 下書きを集めて、ざっと添削する。
- 清書させる。

これだけである。ストーリー構成の練習はしないし、導入部分を与えることもしない²⁾。

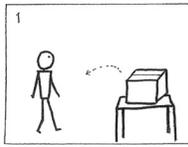
できあがった作品は GDM ならではの特徴を備えている。いわゆる一般の「4 コマ漫画」とは趣が違う。本稿では、実際の生徒作品を取り上げて、その特徴を考察していく。

生徒の作品³⁾

次の作品 A, 作品 B, 作品 C は中学 1 年の 1 学期末のものである。生徒たちは、*English Through Pictures Book I* (以下 EP 1) に沿って学習を進めた。主な学習項目は以下の通り。

- Be 動詞の現在形 is, am, are と過去形 was
 - 一般動詞 take, put, give
- 未来, 現在, 過去の 3 つの時に応じて文が変換することを学ぶ。例えば,
- The man will take the bag off the table.
He is taking the bag off the table.
He took the bag off the table.
- のように。
- 前置詞 in, on, off, to

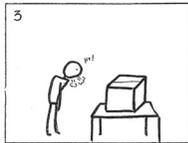
〈作品 A〉



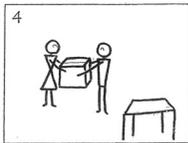
This is a man. His name is John.
He will take the box off the table.



He is taking the box off the table.



He put the box on the table.

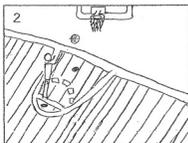


Her name is Emily.
Those are John and Emily.
They took the box off the table.

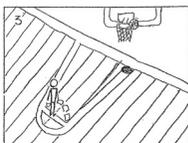
〈作品 B〉



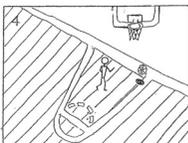
I am here.
This is a ball.
The ball is in my hand.



The ball is there.
It was in my hands.

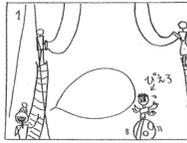


The ball is in the goal !

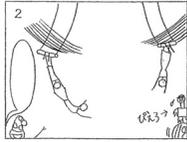


I will take the ball in my hands.
The ball is off the floor.

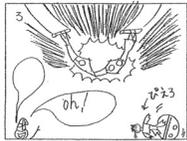
〈作品 C〉



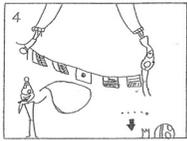
That is a man. I am Okawa.
That is a woman.
That swing is in his hands.
That swing is in her hands.



The man will give a man to the woman.
The feet are in his hands.
She is there.



He is giving the man to the woman!
The man's hands are in her hands.
The man's feet are in his hands.
She is here. They are there.



He gave him to her.
My hat is on my head.

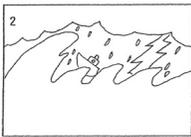
次の作品 D は中学 1 年の 3 学期末のものである。EP 1 に沿って学習を進めた。上記に加え、以下の項目を学習した。

- 一般動詞 go, see, have, say, make
- 疑問文 What ...? Where ...? Yes-No question とその答え方。
- 関係詞 which, what
- 前置詞 with, over, under, between など。

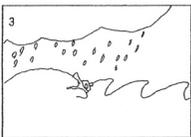
〈作品 D〉



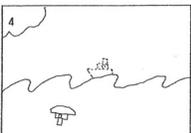
This is a ship.
The ship is on the water.
It is saying, "SOS."



This wave is high.
Will the ship go in the water?
It said, "SOS."



The ship is going in the water.
This wave is low.



The ship was on the water.
It is in the water.

どんな特徴があるか

(1) 客観的な描写に徹する

この4つの作品に共通することの一つは、事物や動作の客観的な描写に徹していることである。そこにあるのは何か。それはどこにあるのか。そこにいるのは誰か。その人物は何をする(何をした)のか。それ以外の事柄が書き込まれていない。

作品Aであれば、「その箱は重い。」「彼は箱を持ち上げることができない。」「彼は困っている。」「二人で持つことができてよかった。」など。

作品Bであれば、「私はバスケットボールが好きだ。」「シュートが決まってうれしい。」など。

作品Cであれば、「素晴らしいパフォーマンスだ。」「私はびっくりした。」など。

作品Dであれば、「悲惨な事故だ。」「救助できなくて悲しい。」など。

中学1年生である。そのような中身をあらわす語彙を持ち合わせていない。だから、これらの作品は不完全で拙いものなのだろうか。「heavyという単語を知らないものなあ。まだまだだな。」と受け止めるのか、「heavyという単語を知らなくても、うまく表現したものだなあ。」と受け止めるのか。そのような受け止め方の問題がある。

もう一つは、逆にそのような語彙を知っていたとしたら、このような作品が生まれたのだろうか、という考え方ができる。

例えば作品A。「あまりに～すぎて…できない」ということを表す言い方を知っていたとしたら (The box is so heavy that he cannot take it up.), このような場面の切り取り方は思いつかなかっただろう。

例えば作品B。shootという語を知っていて、「シュートした、ってどう表したらいいかな」というふうに考えてしまうと、シュートする行動をこのような細かな瞬間に分けて場面を切り取る発想は出てこないだろう。

その意味では、生徒の学習が進んで、語彙や文型・文法の知識が増えていくと、このような作品は生まれないだろう。そして、別の表れ方をするだろう、と想像できる。

GDMでは、事物や動作の客観的な描写をすることをまず学ぶ。感情とか内省を表すことは後回しにされる。それに対して、「感情は大切である。それを表現させるべきだ。」という意見があるかもしれない。しかし、感情を表す語は、感情のおおざっぱな状態を指し示しているだけであって、実際の感情はもっと複雑で、極論を言えば、ことばで尽くせるものではない。それよりも、読者に感情を引き起こさせるように、場面を詳細に描写することがまず大事なのである⁴⁾。

(2) 連続した場面の切り取り

もう一つの共通項は、連続性ということである。1コマ目が必然的に2コマ目につながるように、場面が流れていく。時間の幅は作品によって違い、1コマ目から4コマ目にいたるまでの時間は、作品Bでは何秒という時間だろうし、作品Dではいくばくかの時間がかかっているはずだ。しかし、いずれも場所の設定がなされ、それが時間軸の中で表現されている。

このような作品のつくりになるベースは、GDMの授業で、そのような体験をしてきているからである。1冊の本を手に見ているのを見て、My book is in my hand. それをカバンにしま

おうと決めて、I will put the book in my bag. カバンに入れながら、I am putting the book in my bag. 入れ終わってから自分の行動をふりかえって、I put the book in my bag. カバンの所在はどこか。The bag is in my bag now. It was in my hand.

このような練習を実際の場面で、そして絵を使って練習する。ふだんのこの積み重ねが、作品づくりの発想の底にある。

(読者の中には、「これはストーリーとは言えないのではないか」という意見があるかもしれない。Sequence, 「一続きの場面」, 「連続する場面」と言うべきかもしれない。この点については今後の課題としたい。)

(3) ことばの適切、不適切の問題

3つ目に、使われている語の適切さに関する問題を取り上げる。例えば、次のような意見があるだろう。

作品 B. 「4 コマ目の状況では、take よりも catch の方が適切なのではないか。」

作品 C. 「空中ブランコ的一方からもう一方へ人が移る。それを give で表すのは無理があるのではないか。」

作品 D. 「It is saying, "SOS." は不自然ではないか。」

このような意見に対して、どのように対処すべきか。2つの立場を示す。

- (A) このような誤った言語使用をさせてはいけない。日本語を介さず direct に意味を理解させようとするからこのようなことが起きる。日本語を使って明示的に知識を与え、誤りの起きないようにすべきだ。
- (B) この言語使用が不適切だとしたら、それを学ぶよいチャンスである。生徒が自分なりに考えて自分の作品の中で使ってみようとした積極性を評価し、その上で、適切な表現について考えていくことに意味がある。

私は (B) の立場をとる。GDM では、場面の中で語の意味を理解するように仕向けられる。「あ、こういう意味か。ということは～の時もこうなるだろう」というふうに頭を使う。それがこのような作品創作の原動力になっている。習った語で日常の場面を自分なりに切り取ってみたい。その意欲が作品を支えている。それは時には、妥当な言語使用を逸脱することがあるかもしれない。大事なことは、それに気づいて学べる機会を作ることである。

まとめ

以上の考察をもとに、「絵と英文で4コマの作品を作る」という実践の意義と方法をまとめる。

- (1) GDM に授業をベースにすることによって、実践のステップは非常にシンプルになり、だれにでも取り組みやすいものになっている。
- (2) 事物や動作を客観的に描写する訓練になる。
- (3) 4コマの絵をかくために具体的な場面を決める必要がある。書こうとするトピックについて、抽象的で一般的な表現で終わらないための手がかりになる。

- (4) 書きつつある生徒を見てまわることは大切である。誤った綴りを書いていたたり、文法が定着していない生徒を指導したり、書き進まない生徒へアドバイスをすることができる⁵⁾。
- (5) できあがった作品をみんなで共有する時間が貴重である。そこで、より適切な言語使用、センテンスを並べる順序、場面の展開などについて考え学ぶことが可能になる。

今後、多くの実践の成果が積み重ねられ、生徒の創造性を刺激するライティングの一つのジャンルとして確立することを望みたい。

注

- (1) 立花千尋「4コマ漫画の創作」樋口忠彦（1995），pp.191-196.に所収。
- (2) 片桐ユズルほか（1999），pp.159-161.
- (3) いずれも私が担当した1996年度中学1年の男子生徒のもの。文字も手書きだが、本稿では、読みやすくするためにタイプし直した。作品AのJohnの綴りは、元はJhonとなっていたのを訂正してある。
- (4) 吉沢郁生（2012），pp.13-18.
- (5) 生徒の書きつつあるプロセスに付き合うことの大切さを、私は米国発祥のワークショップ方式の実践から学んだ。フレッチャーほか（2007）参照。

参考文献

- 片桐ユズル・吉沢郁生編著『GDM 英語教授法の理論と実際』松柏社, 1999.
片桐ユズル『基礎英語の教え方』松柏社, 2014.
樋口忠彦編著『個性・創造性を引き出す英語授業』研究社, 1995.
吉沢郁生「気持ちを書かせるのは難しい」GDM Year Book, No.63, 2012.
ラルフ・フレッチャー&ジョアン・ポータルピ(小坂敦子・吉田新一郎訳)『ライティング・ワークショップ―「書く」ことが好きになる教え方・学び方』新評論, 2007.

相沢佳子 『C. K. オグデン：「ことばの魔術」からの出口を求めて』

(東京：清水書院, 2019)

飯 嶋 良 太 (福島大学)

日本語の情緒的な言葉を多用した中身の薄い演説が日本中に流れ、大変な時代だと思っていたところに、GDM 研究会から新しい書籍の情報がもたらされた。

著者はベーシック英語について長く研究してきた言語学者で、チャールズ・ケイ・オグデンの没後 50 年にあたる 2007 年に『850 語に魅せられた天才 C. K. オグデン』という伝記を発表しているが、その同じ著者が同じ人物の新しい書籍を発表するに至った理由が、この本の前書きから読み取れる。オグデンの業績の重要性が未だに認識されていないこと、言葉の空洞化によって思考停止に至る現象が現在のネット上でも顕著であること、前著を出版した北星堂が廃業中で、前著も絶版であること等が述べられている。発行年がこの人物の生誕 130 年の年であるとも書いてある。

前著が言語学者としてのオグデンとベーシック英語に焦点を絞って書かれていたのに対し、今回は人物としてオグデンが多方面に通じた知識人であり、その風変わりな行動、様々な人物との交友関係、ジェレミー・ベンサム研究についてなど、広く深く解説されている。そういう多方面での研究の果実としてベーシックの開発へ進んで行った過程も分かりやすく解説されている。

一読した印象としては、誤記の多さが気になった。たとえば、*Brighter English* (32) というのは *Brighter Basic* の誤りだろう。他にも「マジョリートツ・トッド」(38)、「ランカスシャー」(43)、「末公開文書」(47)、「翌年 1 月に号に」(67)、“aignifics” (95)、「20 も直接に責任を持って」(101)、“shepher” (108)、「そからは」(116)、「Iope 対 dope」(119)、「共存じている」(126) といった箇所は、何らかの誤記であろう。編集者としてのオグデンが小さな誤植も見逃さなかったと書いてあるので、書評を書く側としてもその精神を尊重し、あえて指摘することとした。

著者の専門から外れる生物学・文学に関する記述にも、いくつか誤解が見られる。例えば、ダーウィンが専ら化石の研究をしたように書いてあるが、題名を挙げている『種の起源』における記述の大部分は、ダーウィンの生きていた 19 世紀に生存していた動植物についてはなかったか。又、バーナード・ショーの『武器と男』は小説ではなく、戯曲である。ベーシック英語による劇として上演できる形になっていることが重要である。更に、ジェイムズ・ジョイスが朗読した自作の文章は、独立した作品ではなく、長大な奇書『フィネガンズ・ウェイク』のごく一部である。

ただし、ジョージ・オーウェルの『1984 年』について述べている箇所は正確で、今の時代にとって重要な指摘と言える。

問題はあっても、この新しい伝記を兼ねた解説書は、オグデンと親交のあった人たちの回想録や、膨大かつ難解な著作、公刊されていない手紙などをもとに、その人物像を明らかにしており、一般読者にとって、前著より親しみやすくなっている。

最初の方で、興味深い逸話の数々から浮かび上がる人物像はシャーロック・ホームズのように、読者を引き込むことに成功している。そこからケンブリッジでの学生生活、様々な研究や事業などについて説明があり、英文学者 I. A. リチャーズとの出会いやベーシック英語の考案へと、この伝記は進んでいく。

ベーシックに関する考察は簡潔だが、より深まっているように感じられる。基本動詞を中心に何十年にも渡って研究を続けてきた著者のたどり着いた簡潔さと言える。

更に画期的なのは、オグデンと I. A. リチャーズの共著であり、ベーシックの理論的な基盤となる『意味の意味』と、その哲学的な背景となるペンサム思想について、分かりやすく簡潔に説明してあることだ。大変に難解な理論を噛み砕いて、長くならないようにまとめていることに感謝したい。

ロンドン、レディング、ケンブリッジ、ロサンジェルス、カナダのハミルトンにあるオグデンの資料館や文書館の訪問記は、場所と資料の説明だけでなく、そこで出会った人物について述べている点も興味ぶかい。

小さな誤記や誤解はあるにせよ、読みやすく興味深く、ベーシック英語について既に詳しく知っている人にも、これからという人にも、勧められる著書である。

中郷安浩さんとの学び

GDM 英語教授法研究会の発音の先生として、長年私たち会員にご指導くださった中郷安浩さんが、2019年12月7日の西日本支部での発音トレーニングをもって、講師を退かれることになりました。

この日はいつもの時間より少し早めに集まり、会場近くで昼食会をしました。集まったメンバー一人ひとりが、長く GDM にかかわってくださった中郷さんとの思い出をそれぞれに話しました。その録音をテープ起こしし、それぞれの方に加筆修正してもらった文章をここに記します。東日本支部の近藤ゆう子さんも寄稿下さいました。中郷さん、GDM を離れても、どうぞ毎日を元気にお過ごしください。今まで本当にありがとうございました。

.....

(吉沢郁生) 私が初めてスピーチ・クリニックを受けたのは、1980年夏のGDMセミナーでした。現在までこんなに長く継続しているスピーチ・クリニックって、日本全国、ほかにあるのでしょうか。今思うと、そのスピーチ・クリニックが今日まで私が中学・高校の英語教師を続けてこれた原動力でした。GDMでは教師の話す英語でクラスを引っ張っていきますから、音声の知識を身につけ、きちんと英語を発することは必須でしたが、GDM以外の授業でも、テキストをきちんと読んで聞かせられなかったらお話しになりません。ですから、音声について学び実践することは、英語を教える上での土台なんです。そのことを今の若い人たちに知ってほしいですね。「発音のこともできた方がいい」というレベルの問題じゃないんです。すべてのベースなんです。もう一つは、native speakerの教師のことです。近年どんどん英語圏の外国人が学校現場に入ってきています。そうすると、「発音のことはnative speakerの教師にまかせよう」という風潮になってきているように感じます。多くのnative speakerの教師は熱心に指導しています。でも、発音のモデルを示すことはできても、個々の生徒に寄り添って丁寧な音声指導はほとんどできません。初心者に対するきめ細かな指導には限界があります。ですから、日本人の英語教師がきちんと責任を持って音声指導できるようになるべきだと思うんです。

(上島光代) 学生の間、特に発音について学校で学んだ覚えはなく、高校の留学中に通じなくて困り、そこで初めてrとlの発音の違いを知ったほどでした。その後もwh, wの発音は本当に通じにくい。またsの発音が違うと言われる等発音には苦勞の連続でした。“sh”と“s”の発音が異なることはGDMに来てから初めて知りました。しかし、異なることは分かっても、ではどう発音したらよいか分かりませんでした。GDMに来て、中郷先生のクラスにでてわかるようになりました。

耳がよいと英語を話しているうちに自然と気がつくのかもしれませんが、なかなかそれでは気がつかない私にとっては、日本語の音と比較しながら1から1音1音の音の出し方について、口の形はどうしたらよいか、どこに注意して音を出すのか等を丁寧に教えてくださったことは本当にありがたかったです。今では“s”はほぼ問題なく、“w”は気を抜くと伝わりにくい

時もありますが、それでもどうしたら伝えることができるかが分かりました。

発音クラスで使っていた先生の発音の本は、バイブルとして振り返りたい時、疑問が出たときにいつでも見られるよう持っています。この学びを活かし、教室で教える時にも、新しい言葉を学ぶ時点で、伝わる発音ができるよう伝えていきたいです。本当にありがとうございます。

(伊達民和) 中郷さんとのつながり？ 同じ大学の同じ学部で、学年は違ったんですけどね、英文科でね、彼は当時英文学が一番優勢な時代に英語学というね、当時マイナーな分野に入られて、しかも発音の方に入られたから、それは画期的なことやったんでしょうね。在学中は、僕は中郷さんと親しくさせてもらっていたけど、もともとは英文科に行くつもりなかった。英文科では、中郷さんがシェイクスピアの学生演劇のディレクターをしておられて『マクベス』を公演する（於：難波の高島屋ホール）計画をしていた。英米文学科は、20名ばかり学生数で、男女半々だったので刺客、殺し屋の候補がいないということで、キャンパスを歩いていたらどうも人相の悪そうな、ちょっとドスのきいた顔で歩いていたんでしょうね。ある日、自己紹介されて、3年次に（専攻を選ぶときには）英文科に来ないかと誘われて、それが中郷さんと会った初めての時やね、それまで全く僕は英語教員になるつもりなかった。添乗員になるつもりで、僕の親父の仕事の関係で、日本旅行に就職が内定していた。ところが8月に教員採用試験を受けたら通ってしまった。教職対策の勉強をしていなかったけれども、当時はベビーブームでたくさんの新設校できていたので、大阪府教育委員会は、優秀な人材を先生として選ぶ余裕なかったわけよ、だから、ちょっと英語さえできたら、採用試験にパスした。

さて英語の教員になって今度は音読せなあかん、一クラス50数名でしょ、あんまり変な発音もできないからということで、ちょっと発音勉強しだした。当時、中郷さんは、大学の教員としてYMCAの英語教育にも関係していた。僕が4年生になる少し前の3月、ある日、「ちょっと教えにこない？」と言われて、僕はYMCAに入った。その後ずっと中郷さんの後を追いかけているわけ（次いでながら、Yで教える前に、いわば「資格審査」というかたちで面接をされたのが教務部長の岩坂正雄さんだった）。

高校の教師になってからもGDMには、まったく関係なかった。存在すらも知らなかった。ある日、中郷さんがYMCAの喫茶店でね、「伊達君ちょっと頼み事がある」と切り出した。「御殿場セミナーで、発音クリニックを担当しているけど、もう体力の限界だ。朝の6時から起きて、晩の10時まで。倒れそうや。」（当時、彼の年齢は35ぐらいだったかな）。「ちょっと手伝ってくれないかな。」ということで、とりあえずよくわからんけど御殿場のGDMに行った。8月のセミナーね、吉沢美穂さんにお会いした。とても偉い先生だと聞いていた。実は、僕も実際1~2年は一般の参加者やったんですよ。当時80~90人くらい参加者がいたね、物凄い活気のあるイベントだった。中郷さん30歳半ばで若かったけど、近くで見ても体力の限界だった。升川潔さんから「伊達さん、ちょっと中郷さん手伝ってあげてよ」と言われた。吉沢さんもね、「teachingはもういいから、いいから」って2年目に（クリニックを）手伝いだした。その後、「この体制でいこう」となった。「君はGDM teachingよりも発音クリニックのほうが向いているよ」とおだてられて以来、中郷さんとずっと一緒にやってきた。僕は、当初は高校の教員で32歳じゃなかったかな。蒼々たる参加者がセミナーに沢山来

ていた。大学の先生も来ていた。当時は、GDMって珍しい教授法でしょ。教職課程で教えている大学の先生もね、GDMってどういうものか見るために、偵察で来ていた。北海道から沖縄までね。大学の先生もね、発音クリニックを受ける申し込みをするからね、やめてほしかった（全員 苦笑）。どんな指導法するか見たかったわけよね。そんなわけで中郷さんとずっと一緒にやってきた。セミナーの発音クリニックだけでは足りないからね、発音ワークショップがはじまったわけです。最初は東京で、次いで神戸でも。

今思えば、（大げさに言えば）中郷さんがいなければ、僕は今頃、日本旅行の役員として過ごしているかな、でも中郷さんと出会って良かったと思っているよ。…というわけで中郷さんとの出会いは、キャンパスでの肩たたきでした。

（河村有里子） 私は、月例会前の発音クリニックにもほとんど出席していませんでしたし、いい生徒ではなかったと思います。ですが、個人的にお世話になっていたことがあります。もう18年くらい、GDMで習った生徒どうして集まって月に2回読書会をしているのですが（そのなかで教える側になっているのは私だけですが）、奈良から千里の山奥まで、わざわざ中郷さんが来てくださっていたことがあるんです。約6年間ほどお世話になりました。その仲間達はいまだに、「中郷先生に教わったあのトレーニングはやっぱりすごく良かった」「自分たちの勉強の基礎になっていて、有り難かった」と言っています。発音だけじゃなくディクテーションの指導もしていただき、みんな勉強熱心なので、すごく真面目にディクテーションに取り組んでいました。今もみんな、松川さんがすすめてくださったカズオイシグロの原書を読み、「難しすぎる」と苦しみながら勉強を続けています。今日の会のこともみんなに伝えたいと思います。今まで大変お世話になり、ありがとうございました。お疲れ様でした。

（山崎典子） 私も良い生徒ではなく…予習をしない私を毎回励まして下さった先生に、この場を借りてお礼申し上げます。でもすごく発音記号を気にして読むようになりました。あと、「なんとなく」思っていたことを、理論的に理解できたのは『こうすれば英語が聞ける』のテキストと先生のご指導のおかげです。例えば、次の音に影響されて同化される音があること（例えば、両唇音に先立つ歯茎音/t, d, n/は両唇音/p, b, m/となる。Mother's at bay.だと“at bay”のt音がp音になる。これは音が聞こえていないわけではなく、「閉鎖」だから聞こえなくていい。）。そういう同化現象が、聞き取りの難しさの原因の一つだということ。英語は腹筋を使うこと（先生の腹筋にhands onさせていただき、発話の際の先生の腹筋の動きに驚く！自分も頑張ってみる！）。日本語と英語のリズムの違い（同じリズムで読む練習をたくさんしました。Bears eat honey. The bears eat honey. The bears will eat honey. The bears will eat the honey. The bears will have eaten the honey.）…などなど学んだことは、数え上げればキリがありません。発音クラスで学んだことを身につけられるように、先生に教えて頂いたことを気にしながら英文を読むようにしています。本当にありがとうございました。

（松川和子） 本当に長い長いお付き合いなので、感謝が積み重なって、一言では言えないくらいです。そうですね、奈良YMCAに来て頂いてほんとに私の若い頃から、お箸を口に入れて教えてもらったり、腹筋が大事だということを教えてもらったり、体験をしながら発音を学ぶ。

中郷さんの口を見ながら、自分の口で同じ発音をするにはどうすれば良いかと一生懸命やってみたり。大学でももちろん習っていたんですけど、ほんとに頭だけで。自分の身になっていなかったものが、ああこういうことなんだな、というのを体験して学ぶことができたのが本当に私の宝物といいますか、吉沢さんもおっしゃっていたけど、言えるということが自信になって。前はセミナーのときにも、(中郷さんが)後ろに立って下さって「それは違うよ、いまの違うよ」って言って下さったことがあって何度も。それが怖いけれどもなんか、すごく有り難いこともあって、今の私を形作っているのはGDMであり、クリニックでありと思います。(「それから aspiration のことね。」中郷さん) そうそう、紙を口の前に置いて、最初は紙が動かなかったんですけど、tやpの音をしてね。今ではそれがしっかり動くので生徒にも必ず教えてね。このまえ旅行に行ったときに、ガイドの方と私は英語で話して、その方はイタリア人なんですけど英語をしゃべる方で、あなたはイギリス英語ですね、って言われたんですよ。だから私の英語が、大学ではアメリカ英語だったんだけど、イギリス系の発音なんだということがね、言われて「あ！」って思ったんです。おかげさまで。本当にありがとうございました。

(麻田暁枝) GDMとの最初のきっかけは、YMCA 主事の岩坂正雄さんに声をかけて頂いたことです。サマーセミナーのモデル授業に使う小学生の面倒をみて下さいと言われたのです。男子小学生には男性スタッフがいるが女子には女性が必要ということでした。GDMの先生方がセミナーで授業やトレーニングを受けてらっしゃるのを横目で見ながら、小学生と虫取りやゲームをして遊んでいました。次の年に岩坂主事から、「YMCA 小学生英語クラスで生徒募集をしたら、たくさん集まり過ぎて、全然GDM先生が足りない。研修を受けて教えられるように。」ということで、YMCAの講習会やサマーセミナーを次々受講し特訓をうけました。1970年の大阪万博の頃で、大阪は小学生の英語ブームだったのです。

初めて、GDMという教え方を知って、「えー、こんなに意味を深く考えるん？ ルートセンスから繋がって。」そんなことを考えずに学校で英語を習ってきたから衝撃的でした。また、サマーセミナーを受けた時には、「発音クリニック」というのがありました。クリニックって病院？ というイメージしかなかったので、なにをするのだろう。これも衝撃的でした。短いパッセージを読んで、細かくイントネーションや発音のチェックを受けました。同じ音、例えば [t] の音なら、最初に来る時にはアスピレーションがあるが、真ん中に来れば、[d] みたいな音になる、最後に来た時には止めるだけで息を出さないみたいな事を習ってすごくびっくりしました。普通の公立の学校での英語授業を受けて来たので、先生から [v] の音は下唇をかむって習ってきました。細かい発音に関することが全然頭になかったので、発音やイントネーションの仕組みを中郷先生や伊達先生から学び、すごくよくわかるようになりました。中郷先生お勧めのディクテーションをやるとリスニングの力がつく。聞こえているようで、いざ書こうとすると全然分らなかつたり。何度も何度も聞いてわかってくるという訳で、けっこう力がついてきたと思います。本当に、いろいろアドバイスを頂いたおかげで、音声に気を留め、聞く力もついたかなと思っています。有り難うございました。

(福本 洋) 中学、高校と6年間英語を習ったけれど、使えない。もう少し使えるようになりたいという思いと、学校に行っている間に取れる免許は取っておきなさいとの助言で、私は教

職課程を取り、教科教育法として GDM に出会いました。卒業後すぐ、GDM は 5、6 年生が中学に行った時にとっても役立つと思い、自宅で教え始めました。また中学校で非常勤講師として働くことになり、発音も学びたいと思いました。私が中 1 で初めて出会った英語の先生は、僅か 1 学期間しか学びませんでした。発音がとても綺麗で忘れられませんでした。たまたま友達が教えてくれた新聞記事のセミナーに参加したところ、それは短大で学んだ GDM のセミナーで、そこで発音も教えているというものでした。偶然にも GDM とも再会しました。

GDM のセミナーでは当たり前になっている発音指導ですが、GDM と合わせて発音、イントネーションなど音声に関わることも学ぶことができるのはとてもありがたいことだと思います。私が関わり始めた頃は、セミナー中に別メニューで中郷先生、伊達先生、村上先生といった発音指導の先生方が個人的に発音をチェック、指導してくださいました。全体の講義もあったと思います。私が GDM に関わりしばらく経ったある年、中郷先生が大阪の NHK で週 1 回、半年間、発音講座をしますとのことで、通いました。その後、天王寺の YMCA でも半年、合わせて 1 年ほど集中して発音を学びました。先生の発音指導は、鏡、箸、紙などを用いて、口の形、舌の位置を確認しながらでした。どのように音を作っていくか、また正しい音をよく聞き、その音をどれだけ上手く再生するかの訓練。R と L、S と SH、S と TH のちがいや F、V、TH、P や T などの音を意識しながら単語を発音するのはとても難しいことでした。でも、おかげで私の発音は随分良くなっていきました。聞き取りも合わせて上達しました。

中学校の英語教師として、GDM と発音指導はとても役に立ちました。発音の指導をする時、その時のやり方を少し使わせてもらっています。3 年前から小学校の英語教育に関わっています。GDM とこのセミナーでの音声指導は今も私を支えてくれています。

また、最近あまりされなくなりましたが、初めて外国語を学ぶ子どもの気持ちになって英語以外の言語を GDM で学ぶ体験。私はユズルさんから英語教授法としての GDM を学ぶ前にイタリア語で体験しました。そして、中郷先生と言えば、アイルランド。アイルランド語を GDM でしていただいたことを思い出します。これも今の私に繋がっているのです。

ター メー アンスヤ ター トゥー アンスン
Tá mé anseo. (I am here.) Tá tú ansin. (You are there.)

中郷先生、長い間ありがとうございました。

(昆布孝子) 中郷先生については、皆さん言われた事と殆ど重なってしまいます。私の GDM の出会いは、英語嫌いの生徒がほとんどだと言う公立高校にいた時です。なんとかしないといけないと思っている時に、奈良 YMCA で小学生に GDM で英語を教えている友人が紹介してくれ、授業参観、勉強会に参加しました。YMCA の勉強会ではいつも中郷先生が発音の指導してくださいました。これが先生との初めての出会いでした。

1976 年 3 月に六甲セミナーが私のはじめて GDM セミナーの参加。発音クリニックを受けるための課題のテープ提出し、先生の個人指導をビクビク、ドキドキしながら受けました。そこで、自分の発音、英文の理解力など様々な事に対しての気づきがありました。英語の発音、教授法の学びを通じて、生徒に何を教え、何を伝えるべきかを学んだセミナーでした。また御殿場の夕食後に演じられた先生方の英語劇での表現力や演技力の見事さ驚愕しました。

その後公立から私学へ移った私は、中学 1 年生に GDM で教える機会を持ちました。ある年、中学生対象の高松宮杯スピーチコンテスト全国大会に出場する生徒が生まれ、その指導を中郷

先生にお願いし、先生のお自宅で指導して頂きました。結果上位入賞できましたことを思い出します。

現在も、広島の高校の教育相談顧問として、先生方の相談に乗れるのは、GDMで確かな教授法を学び、先生方にしっかり私自身を育てて頂いたお陰だと思っています。発音に関しては伊達先生、村上先生、中でも中郷先生には、自宅でレッスンをして頂くなど、大きく育てて頂き、感謝でいっぱいです。有難うございました。

(近藤ゆう子) 一昨年、GDM周年パーティーで中郷先生のクラスのことを伺い、思い切って大阪のクラスにお邪魔しました。久しぶりの中郷先生のクラスでしたが、その鋭い切り口は相変わらずでどんな小さな音のずれも聞き逃すことなく、御殿場のバルコニーでクリニックを受けた時と全く同じでした。その耳の良さは天性のものだと改めて思いました。中郷先生が撒いた種は、発音ワークショップにしっかりと引き継がれ、我が家で行われる月1回の発音勉強会にはワークショップ参加者が毎年新たに加わってくださり、総勢16名?と賑々しいこと!そして毎年、息子さんの慶先生のレッスンをみんな楽しみにしております。

実は発音ワークショップを関西で近々に開きたいと東京のメンバーで語っております。その時にはぜひ遊びにいらしてほしいと思っております。

And finally, I would like to express how truly grateful I am, for if I had not met Prof. Nakago, I would not have my present job and life filled with such great fun. By the way, I started Irish dancing!



◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2018年8月～2019年7月)

■2018年

8月11～13日	夏期英語教授法セミナー	オリンピック記念青少年総合センター	
9月8日	月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	between (EP 1 p.43)	加藤 准子
	トーク	「本を読むことを楽しむ体験」	吉沢 郁生
10月20日	月例会	津田塾大学同窓会会議室	
	デモ	make を中心に (EP 1 p.91)	伴野 温子
	トーク	「ベーシックで読む聖書」	飯嶋 良太
11月10～11日	秋のセミナー	邦和セミナープラザ (名古屋)	
12月22日	月例会	飛ぶ教室	
	デモ	A Jazz Band (Basic Reading Books 1)	新井 等
	トーク	NY タイムズの中の Basic English	黒澤 文子
1月12日	月例会	田道住区センター	
	デモ	thing/person There is/are (EP 1 p.37)	唐木田照代
		Basic English /200 Pictured より	
2月2～3日	ベーシック・イングリッシュワークショップ/月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	The Old Horse	小林 義明
	トーク	「聖書に見るイスラエル民族について」	猪俣 徳枝
3月30日	月例会	目黒区勤労福祉会館	
	デモ	Book 2 pp.281-2	多羅 深雪
		Basic English/200 Pictured より	
4月20日	GDM 教師養成コース/月例会	すみだ産業会館	
	デモ	英語以外の外国語体験	伴野 温子
	デモ	here, there まで	唐木田照代
	レクチャー	GDM 理論	新井 等
	グループワーク		
5月12日	GDM 教師養成コース/月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	This/That a, my, your, his, her	加藤 准子
	レクチャー	授業の組み立て方	唐木田照代
	グループワーク		
6月2日	GDM 教師養成コース	すみだ産業会館	
	デモ	in, on, the	伊藤千津子
	レクチャー	教材, 写真, 絵について	加藤 准子
	グループワーク		

6月15日	GDM 教師養成コース すみだ産業会館 デモ take グループワーク 参加者の授業	伴野 温子
6月29日	GDM 教師養成コース/月例会 すみだ産業会館 参加者の授業 デモ see, do not see, sees, does not see トーク 実践報告	服部 正子 黒瀬 るみ
7月27日	月例会 津田塾大学同窓会会議室 トーク 「GDM, ベーシックから見直して」 総会	相沢 佳子

◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2018年9月～2019年8月)

■2018年

9月16日	月例会 京都市北文化会館 デモ seem (EP Book 2 pp.103-106) トーク 「英語多読プログラム」	松川 和子 佐藤 正人
10月20日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ Book 3 p.55 トーク 近藤ゆう子さんによる『音声学1時間目の授業』	上島 光代
11月10～11日	GDM 秋セミナー 邦和セミナープラザ	
12月8日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ have (Book 1 p.42)	山崎 典子

■2019年

1月27日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ① which (Book 1 p.50) デモ② When? (Book 1 p.65)	麻田 暁枝 河村有里子
2月9日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ and (Book 1 p.79)	松川 和子
3月16～17日	初級・中級セミナー in Kyoto/月例会 ザ・パレスサイドホテル	
4月20日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター デモ before / after (Book 1 p.46)	山崎 典子
5月25日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター トーク 「中学校英語と GDM の関わりについて」	松浦 克己

6月22日	デモ see/sees (EP 1, pp.4-5) 中学校英語のための教師養成セミナー in Osaka ～教科書を深い学びに変える GDM～ 大阪市立総合生涯学習センター	松川 和子
	1. 模擬授業：GDM 1・2 時間目の授業 (be 動詞)	
	2. トレーニング	
	3. 実践報告：「GDM を活用した授業改善へのサポート」	松浦 克己
	4. 模擬授業：現在進行形と過去形 (take)	麻田 暁枝
	5. 模擬授業：一般動詞 (see/sees/do/does)	松川 和子
	6. Q&A	
7月12日	月例会 (総会は9月に延期) 大阪市立総合生涯学習センター Web ミーティング報告と話し合い	
8月9～10日	GDM 授業力 UP セミナー「アクティブ・ラーニングの授業創り」 邦和セミナープラザ	

◆◆◆編集後記◆◆◆

片桐ユズルさんの(1975)『意味論と外国語教育』くろしお出版,「14章 Graded Direct Methodの言語観」から引用します。「子供といっしょに,子供のなかにかくされているものを探求し,新しい思想の成長を楽しむのが,ほんとの探求的教師なのだ。」これを読んでワクワクした後,2020年の春コロナ禍から発したGDM会員の様々な試行錯誤を共有しました。色々な反応があり,私の頭の中はぐるぐる回りでした。リチャーズの意味論的基礎と認知的段階付けの理論 theory の上に,実践がある。そして日本の先人研鑽上の指導がある,では新しい試みは会員内だけで共有するのか,何をどんな風に示すのが「新しい会員になってくれそうな方」に有効なのか,誰に向けてのGDMなのか? 子ども達・学習者なのでは,いや学習者にとって結果的に有効なのは理論からはみ出さない実践,と堂々巡り。正しさに依存したくなるけど,正しさからは分断しか生まれないと今朝の新聞に書いてあったことを自戒とします。

(山崎典子)